
極卒くんとおんなのこ

紅葉ふらのん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

極卒くんとおんなのこ

【Nコード】

N6695L

【作者名】

紅葉ふらのん

【あらすじ】

ホップンミュージックより、極卒となのこが淡々とコミュニケーションをとっている短編集です。

要自己設定注意。

話順は何となく時系列になっており、印は話の大筋と関連するもの、それ以外は一話完結といった風に一応区別を付けてあります。

あさき氏の楽曲を引用・参考にしている部分もございます。すてき

な楽曲に敬意を表して。

はじまり

「あなたに会えてよかった」

ぼつり聞こえてきたその声に驚き、男は自分の腕の中にいるはずの、少女の姿を確かめる。水の凍えるような冷たさで、彼女は既に気を失っていた。

今 確かにこの子の声が

いや 違う あり得ない

全身が、まるで無数の針に貫かれているかのように、痛い。

身体中の筋肉という筋肉が、すっかり凍りついているかのように、動かない。

ここは薄氷の張った湖の中。たとえ少女が気絶していなくとも、水中で人の言葉を聞き取れる訳がない。

今のは幻聴だったのだ、と男は自分に言い聞かせる。自分が犯してしまった罪を正当化させようと聞こえてしまった、みっともない幻聴。

だが一方で、もしも、これが幻聴でも自惚れでもなく、彼女の心の声とも言うべきものが、直接自分の中に響いてきたのだとしたら、とも望んでしまう。

感覚まで凍ってしまったのか、もう痛みは感じない。空気が欲しくなってくる。

抱き締めた愛しい人の身体が、心なしか固くなっていき

ああああ

静かに、そして急激に、自分一人ではとても抱えきれない量の罪悪感が、胸の内から噴き出してくる。

ああああああ

私は 私はなんてことをしてしまったんだ

駄目だ 駄目だ駄目だダメだだめだ

死んでは だめだ

思い通りにならない体をどうにか折り曲げ、背の高い男は少女を包み込む。

少しでも、まだ自分の中に残っている温もりを、彼女に分けようとして。

そして彼の手にすっかり収まる程の頭を引き寄せると、生気の無い薄い唇に、自らの口を重ねる。

手で外側から、舌で内側から少女の口をこじ開け、肺に残ってい

たなけなしの空気を、そこから出来る限り強く、強く吹き込んだ。
少しでも、彼女の肺に届くように。

頭上を見上げれば、無数の小さな光の点滅と、黒く丸い影が視界に入る。男がいつも被っていた帽子だ。

暗くて上下もわからぬ湖の中、あの星屑と漂う帽子の影だけが、水面のある場所を教えてくれていた。

間に合え 間に合え 間に合え

少女を抱いた両腕を、男は帽子の影に向かって伸ばそうとする。硬直した筋肉が今にもぎしぎしと音をたてるのではないかと思うほど、腕はぎこちなく動きだし、やがて、なんとか自分の頭の上までやってくる。男はそこで最後の力を振り絞り、少女の細々とした体を、カ一杯押し上げた。

男の手を離れた少女が、ゆつくりと、水中を上昇していく。

遙か彼方、男の頭から離れて浮かんだ、あの黒い帽子を目指して。

『まぶかさん』

少女はいつも、男の事をそう呼んでいた。彼がいつも、黒い帽子を目深に被っていたからだ。

私とあの子の 思い出の帽子

あの帽子が 彼女を導いてくれますように

そして誰か 心の優しい人が あの子を救ってくれますように

「……」
「じめん」

微かに口を動かした男の、謝罪の言葉はもう、小粒の気泡にさえならない。

どうか 私の分まで 生きて

私の たい せつ な……

彼の意識は、そこで途絶えた。

「おい、あの湖に浮かんでいる物は何だ」

「は、どうやら女の子のようです」

「『女の子』？ ……おい、湖から引き上げるぞ。救護班を呼べ」

「お言葉ですが、この先では遠征軍が閣下の御到着を心待ちにして

おります。こうしている間にも何人の命が犠牲になっていることか。少女一人の命など、今は目を瞑るべきかと」

「元々勝てる戦だ。私が行かずとも負ける事はあるまい。おまえは私に黙って従っていれば良い」

「しかし……」

「くういい？ ボク、同じ事を二回言うのって嫌いなんだよねえ」

「……申し訳ありません。直ちに救護班へ連絡致します」

生きて 生きて

どうか

いきで

暖かい毛布に何枚も何枚も、まるで赤子のようにくるまれた少女は、その中で静かに寝息をたてる。

彼女のすぐ隣には、安らかな寝顔を優しく見守るかのように、背の高い、びしょびしょに濡れた帽子が置かれていた。

はじまり (後書き)

二人の出逢いの話

出逢えて……ますかね、これ；

冒頭のシチュエーションは「雫」の歌詞を参考にいたしました
目深帽子の設定については、実を言つと自分でもはっきりしていな
かったりします

かげぼうし

「おまえの名は」

「わかりません」

「なぜ湖にいた」

「わかりません」

「何をしていた」

「わかりません」

似たような質問が、どれくらい続くのだろう。少女はここしばらく、椅子の上でたった一つの言葉しか口にしていない。

「どこから来た」

「わかりません」

「これに覚えは」

質問と合わせて、膝に黒く背の高いシルクハットが置かれる。どこかで見たような気もすれば、ありふれた帽子の形になじみ深さを感じているだけのようないきなり気がした。

「わかりません」

相手はついに痺れを切らし、目の前にいるにも関わらず、ふう、とわざとらしく息を吐かれる。

「同じ答えばかりだ」

自分がずっと不満に思っていたことを先に指摘され、少女の苛立ちが余計に募っていく。

「おまえの事で確かに判っているのは、たったの三つしかない」

「三つも?」

そんなにあるとは思ってもみなかったと、少女は心の内で希望の芽を膨らませた。

「女で、子供で、人間であるという事だけだ」

芽吹き始めたはずの希望は、その言葉によって急速にしぼんでしまっ

「そんなこと……それだって、ほんとうにたしかなことかしら」

「なぜそう思う」

「それは……わからないけれど」

「またそれが。気に入ったのか」

こんなに中身のないフレーズを、少女が気に入るはずもない。む

しろ、繰り返し言いすぎて何が何だか、正しく言えているのかどうかさえ、よく分からなくなっていた。

言葉に気を遣うことも忘れ、この流れから脱しようと言問を返す。

「あなたは、あなたの何がわかるっていうの」

「私は極卒と呼ばれている。獄卒鬼のように残忍だと」

「だれにどういわれてるか、なんて、しりたいんじゃないわ」

「そうだろうね」

少女は膝の上の帽子をすがるように抱き込み、そのてっぺんに顔を埋めた。

髪の間から僅かに覗いていた相手の口が、苦しむ自分を前にやりと湾曲する様を、もう見たくはなかったのだ。

終止俯き気味でいたため、そういえばまだ彼の目すらまともに見たことはなかったが、自分を苦しめる人間の顔など、わざわざ目にしておく必要もないだろう。

少しの間が空いた後、真っ暗になった視界の向こうから、先ほどまでの男の声が降ってくる。

「質問を変えよう。今のおまえにとって、確かと言えるものはあるか」

それこそ、分かっていたらここまで苦労はしない。少女はそう言いそうになるのをこらえる。

どうしても、この男に反撃してやりたかった。

「……あるわ」

頭を僅かに上げ、いけすかない形の口元を、こっそり睨み付ける。

「あなたのかお、不気味よ」

これで、相手の機嫌を損ねることができると思ったのに。

「そう」

その口は少女の意に反し、耳へ向かって余計に割けていく。

「それは何より」

完成されたにやけ口を目の当たりにした少女は、本当に、なんて不気味だろうかと改めて感じることもしかできない。

落胆するうちに男は席から立ち上がっており、今の角度からは彼の軍服と白い手、その先で黒く光る爪程度しか目に入らなくなっていた。

これ以上あの口を見なくて済むと思い、少女はほっと息を吐く。
更に、

「今日はこれで止めておこう」

嬉しい言葉を聞いて思わず顔を上げれば、部屋を出ていこうとする男の後ろ姿が見えた。ようやく解放されるらしい。帽子を抱く手に入っていた力も、次第に抜けていく。

だが、ドアを半分ほど開けたところで男は立ち止まった。そして振り返りもせず、短い言葉をひっそりと呟く。

「……『まぶかさん』」

それを聞いたとたん、少女の心臓は待ち望んでいたと言わんばかりに、激しく躍りだした。

全身が硬直して動かなくなり、額に汗が浮き上がる。

「それ、は？」

震える声で黒い背中に呼びかけると、彼はようやくこちらを振り返ったが、少女の瞳は既に、この場にある何をも見ようとはしていなかった。

「おまえが目を覚ます前、しきりに唸っていた寝言だよ」

「ま、ぶか……さん。まぶか、さん……！」

視界がかすみ、世界が白く濁っていく。その中で、おぼろげながらも残っていた男の黒い輪郭も次第に形を変えていき、いつの間にか、シルクハットを被った、背の高い男のものになっていた。

のっぴな影法師は、静かに話しかけてくる。

「覚えがあるのか。そいつは男か」

「……おおきな、おとこの、ひと」

「そいつは、帽子を被っているか」

「ええ……かぶって、いるわ……」

息苦しさに喘ぎつつ、必死で『まぶかさん』の形をした男の声に
応えた。そうすることで、ぼやけた影もはっきりとした姿を見せて
くれるのではないかと思ったからだ。

けれどそれ以上はどうしても、視界のかすみや歪みが取れそうに
なかった。

目を開けているのも辛くなり、目の前が日没のように暗く沈んで
いく。

意識が遠退く向こう側で、男の影が独り言を口にしたようだ。

「やはり、あの帽子人形……」

そこまで聞いたところで意識を保てなくなった少女は、また帽子
の上に顔を伏せてしまう。

刹那、一点に収束する白い記憶の中に、懐かしい匂いを感じた気
がした。

かげぼつし (後書き)

何やら解説っぽいなのこの話

初対面とは言え、少々命知らずすぎだったかもしれませんね

無垢な手

辺り一面に降り積もった雪の絨毯の中で、極卒は、自分に背を向けてしゃがみ込んでいる少女の姿を見つけた。

あんな所にいたのか

そっと近付いて、声をかける。

「何をしている」

しかし少女はこちらに振り向きもしなければ、言葉を返してくる様子もない。

「こんな所にいたら風邪をひいてしまっぞ」

「……まだ、終わってないから」

雪遊びでもしているのかと思って覗き込んでみると、彼女はそういうこともせず、ただ、いつも持ち歩いている二つの人形を、両手に一つずつ被せて遊んでいただけだった。

極卒は、この人形が好きではなかった。特に、少女の右手で愉しそうに振舞っている、背の高い帽子男の人形が。

「そんな事は、ここじゃない所でもできるだろう」

だから一緒に行こう、そう言おうとして少女の肩に手を置いたとき、

「雪は、おもいでなの。わたしと……」

帽子の人形が、少女そっくりの人形の頭を、愛しげに撫でた。

自分の中で何かが切れたような音がして、極卒は無意識に、少女の手から男の人形を取り上げていた。

それは意外にもするりと少女の手から外れ、白い世界に、彼女の白く小さな手が露になる。

「あ」

これにはさすがの彼女も慌てたらしく、こちらに踵を返して立ち上がった。灰色の大きな右目が、ようやく自分に向けられる。

にやり、と口の端がつり上がった。

「やっと、ボクを見たね」

少女はその言葉には反応せず、ただ奪われた人形を取り返そうと手を伸ばしてきた。その慌て様がまた気に入らなくて、極卒は人形を掴んだ右手を、更に高々と上げる。

だが少女もそこで諦めようとはしない。極卒の腹の辺りにむき出しの手を添え、踵を浮かせて、己の背丈の二倍はあろうかという高さ、懸命に人形の片割れを届かせようとする。

極卒はほんの一瞬だけ、自分の体に触れている、少女の素手に目を奪われた。

白くて小さい彼女の手。不純物のない雪を、そのまま凝縮して出

来ているのではないかと見紛う程のそれは、きな臭い世界に暮らす極卒が触れてしまえば、あっという間に溶けて、なくなってしまうように見えた。

「まぶかさん……！」

今にも消え入りそうな細い声に、極卒はふと我にかえる。咄嗟に顔を動かし、少女の顔を、あの丸い瞳を捉えようとした。だが、互いの目が合うことはない。

彼女は、ただ一心に極卒の右手の中を、そこに捕らえられた、帽子の男を見ているのだから。

思えば命を救ってやったというのに、少女は極卒に対して感謝の意を表すどころか、まともにも口を聞いたこともなかった。しかも隙を見つけてはすぐに脱け出そうとし、見付けたときにはいつも、こうしてつまらない人形遊びをしている。

極卒はまだ、一度も、少女の視界に収まったことがないのだ。

不気味な笑顔が、更にその不気味さを増した。

「いない」

ボクのことを　ボクだけを見てくれないのなら

そんな目は　そんなおまえは

いないよ

人形を取り戻そうと執心する少女に、極卒の呟きが聞こえるはずもなく。

彼女の左手を隠している、彼女と同じ顔の人形が、大切な男を助け出すため、必死に両腕を伸ばす。

あいていた左手をゆっくりと上げ、極卒はその大きな手の平で、少女の顔を覆った。突然の出来事に、指の間から覗く瞳は不安に揺らぎ、体が強張っていく。彼女が両手を下ろした頃を見計らって、極卒も人形を持つ手を下げた。

「さようなら」

指先に力をこめる。指が少女の青白い肌に食い込み、骨にぶつかる感触があった。それでもなお、彼は手を緩めようとはせず、更に力を入れていく。

少女の顔面を、砕き割ろうとするかのように。

彼女の瞳の揺らぎが、不安と恐怖、そして痛みで、一段とその大きさを増した。

よく見る目だ、と極卒は思う。彼が殺めてきた人々は、皆、その目を自分に向けてくる。

おまえも その目で ボクを見るんだね

気付かぬ内に右手にも力が入っていたらしく、黒く鋭い爪が、人

形の布の肌を突き破り、中から薄汚れた綿が飛び出した。

人形の惨状を目にした少女の体が、びくん、と大きく震える。それはそのまま小刻みな震えとなり、振動が彼女の骨から、柔らかい肌から、直接自分にも伝わってきた。

「大丈夫、怖くないよ」

「い、いや……」

少女の目から、一つ、大粒の雫がこぼれ落ちた。

どくん、と突然、自分の心臓が強く脈打ったことに驚いて、極卒は少女の顔から手を離してしまう。その反動で、二人はお互いに数歩後退った。

何が起こったのかと狼狽し、己の左手と、目の前の少女を交互に見比べてみたが、状況を理解できていないのは彼女も同じようで、不思議そうにこちらを見つめている。先程まで指先を食い込ませていた五ヶ所が、それぞれ充血して赤くなっていた。

「何を、した」

極卒はもう、涙で潤んだ少女の右目を、まともに見つめ返すことができなかった。

動悸が治まらない。頭がくらくらする。風邪でもひいてしまったのだろうか。

「……どく、そつ？」

どくん

そのとき極卒は、少女が初めて、自分のことを呼んだのだと気が付いた。

心臓が早鐘を打つのに加え、顔が熱を帯び始める。またもや訳がわからなくなつて、先程まで少女の顔を掴んでいた左手を、今度は自分の頬にあててみたが、雪の中で冷えきつたそれをもつてしても、顔の火照りを抑えることはできない。

今や、少女の表情は極卒を怖れるものから、彼を心配するものに変つていた。そんな風に見つめられたのも初めてで、顔はますます熱量を増していく。

極卒は指を伸ばし、左手だけで顔を覆った。

何故かはわからないが、どうしても、少女に顔を見せたくないと思つたのだ。

「ごくそつ、大丈夫？」

「……いけない」

それ以上　ボクを呼んでは

それ以上　そんな目でボクを見ては

いけないよ

「じくそつ?」

さく、と雪を踏みしめて、少女が自分の元へと歩み寄ってくる。

極卒は、このまま自分の顔面を、自らの手で、粉々に砕き割ってしまいたいと願った。

無垢な手 (後書き)

ななこと出会って間もない極卒の話

個人的に、独占欲は自覚のないくらいが好きです

ひまつぶし

少女は退屈していた。

広い執務室のデスクでは、極卒が非常につまらなさそうな顔で、積み上げられた書類に目を通していているが、今の彼女にしてみれば、そんな退屈は些細なもののように思える。彼にはまだ、『仕事』という名の暇潰しがあるのだから。

しかし一方の少女は、そんな極卒の横顔を観察しながら、革張りの大きなソファアの縁に腰をかけて、宙になげだした足をぶらぶらと交互に揺らすことぐらいしか、する事がなかったのだ。

人形で遊べさえすれば、こんな退屈は簡単に乗り越えられる自信があるのだが、それは極卒に固く禁じられているし、以前も彼の前で人形遊びをして恐ろしい目に遭ったことがあるので、とてもすすんでやる気は起きない。かといって、この執務室を出ることも禁止されていた。

少女は小さく、けれども深い溜め息を吐いて、美しい模様の描かれた天井を仰ぐ。

「……たいくつすぎて、死んでしまいそう」

「案ずるな。人は退屈だけでは死ねない」

素っ気ない返答に少々気分を害して、恨みがましい目を再び極卒に向ける。

彼の机の上には、右に読み終わったり判を押ししたりした書類が、

左に依然手付かずの書類が分けて積んであったが、どうやらこの『仕事』はまだ半分も済んではないようだった。

「ねえ」

邪魔をするのはいけない事と知りながら、少女は極卒に話しかけずにはいらなかった。応えてくれないならそれも仕方ないと思っただが、意外にも彼は「何だ」と短く返事をしてくれる。もちろん、書類とにらめっこをしたままだったが。

「ごくそつには、エンゼツっていうお仕事もあるんでしょう?」

「そうだよ」

「エンゼツってなあに?」

極卒は横目で、子供特有の表情を浮かべて返答を待っている少女を見ると、またすぐに視線を書類へ戻した。

「そうだな。短く言えば、自分の思想をおおやけに述べることで、民衆や軍の者達の支持を、少しでも多く集めようとするものだ」

「それは必要なこと?」

「ああ。こと独裁国家に関して言えば、その必要性は高いだろう」

『独裁国家』という言葉を聞いて、少女は極卒が独裁者と呼ばれていることを思い出す。

ドクサイコツカとドクサイシャ。『ドクサイ』には『エンゼツ』

が必要なのだ、と、少女は幼いなりに理解した。

「……わたしも、きいてみたいなあ」

そう一人言のように言っただけを見ると、極卒が心底驚いたという顔でこちらを見ていた。

子供の自分が演説を聞きたいなどと言うのは、彼にとってまったくあり得ないことだったのだろう。

少女は今の空耳でないと証明するために、今度は一言一言を、ゆっくりと噛み砕きながら言う。

「エンゼツ。わたしも、きいてみたいって」

もし聞くことができたなら、多少は暇潰しにもなるかもしれない。実を言うと、それが彼女の魂胆だった。

しかしそんな安易な腹の内など知らない極卒は、面白そうに、そしてどこか嬉しそうに喉の奥をくつくつと鳴らした。

「おまえには退屈なだけだと思っぞ。時間も長いし……」

長い分にはむしろ都合だ。少女は極卒が言い終わるよりも前に「大丈夫よ」と言ってみせる。すると彼はますます満足そうな表情になって、椅子から立ち上がった。

「確か以前、部下が私の演説を勝手に録音したものがあつたはずだ。……少し待っておいで」

そう言っただけで席を離れ、部屋を出ること数分、極卒はどこかから一枚のレコードを持って戻ってきた。

カバーから中身を取りだしたそれを、ソファの向かいに置かれた、古い蓄音機にのせる。

レコードや蓄音機がどのようなものか知らなかった少女は、これから何が起きるのかとどきどきしていた。好奇心のあまりソファからひよいと飛び降りて赤い絨毯の上に座り込み、蓄音機とそれをいじる極卒に期待の眼差しを注ぐ。

「そんな所に座っては服が汚れるぞ」

「いいの」

聞く耳持たない様子の少女に、極卒はまた一つ笑い声を漏らすと、レコードの上に優しく針を置いて、自分の席に戻っていった。

ラッパのように先の広がった管から、いきなり極卒の叫ぶ声が噴き出されたので、少女は思わず全身を震わせてしまう。

『我々は宇宙にあり！』

壮大な台詞から始まったその演説は、それからもずっと同じような勢いで、ずっと同じような壮大さと意味深さを保ちながら、続いていった。

『きゃつらに禍を！』

『ほろろと鳴く猿であり！』

『私を返せ』

理解に苦しむ発言の合間には、時折、極卒のものと思われる奇声

や、ひよひよひよと甲高く笑う声も聞こえ、全身の毛という毛が、いつまでも逆立っているような感覚を覚える。

室内に静寂が戻った後も、少女は絨毯の上に座ったまま、しばし呆然としていた。

「どうだ？」

机の向こうから、極卒が挑発するように言った。

「……なにが、なんだか。……さっぱりわからないわ」

「ひよつ、だろうね。誰かに理解されたくてやっている訳ではないのだ。おまえのような小娘に解られたら、逆に困る」

皆に自分の事をわかってもらうための演説で、何故彼はあえて誰にも理解できない言葉を繰り返すのか。少女はそれを訊ねようとして、結局やめた。

仮に訊ねてみたところで、極卒は答えてくれそうにもなかったし、何より、彼に小娘と呼ばれたのが、少しだけ気に入らなかつたからだ。

それより、彼女にはもう一つ、『演説』を聞いて気になったことがあった。

「……ねえ、一つ、きいてもいい？」

「もちろんだとも」

少女は頭だけを動かして、まっすぐに極卒の薄笑いを見据える。

「……あなたは」

ほんとうに 戦争が すきななの？

極卒は、一度大きく目を見開くと、次にその目を閉じてまたくつくつと笑い始めた。その笑い声はどんどん大きくなり、やがては蓄音機から聞こえてきたのと同じ、ひよひよひよという声が部屋中に響き渡る。

少女は怒られるのではないかと思って身構えた。彼がこんな風に笑うのは、本当に笑いたい気分の時か、怒った時のどちらかだったから。

笑いながら席を離れた極卒は、蓄音機からレコードを拾い上げたかと思うと、それを真つ二つに折ってあっさり割ってしまった。そして未だ座っている少女に、す、と片手を伸ばす。

急に怖くなって反射的に目を瞑ったが、痛みはいつまで経ってもやってこない。

その代わりに、自分の頭が大きな手でくしゃくしゃと撫でられる感覚があり、耳元で、

「おまえは恐ろしい子だよ」

と囁く声が聞こえた。

驚いて目を開けたときには、極卒は既に自分から離れていて、壊れたレコードを屑籠に放り投げたところだった。

彼が大喜びした理由を知る由もなく、幼い少女は拍子抜けして、首を傾げるばかり。

一つだけ確かなのは、つい数分前まで独裁者の声を記録していた黒い円盤が、今や周りの紙塵と何ら変わらない、価値のない存在と化していたことだけだった。

ひまつぶし（後書き）

演説の台詞は「猿の経」より引用いたしました

実は戦争に反対意見を唱えているのではないか、という解釈を耳にして

晴天也（前書き）

この作品には一部残酷な表現が含まれています。お読みになる際は、その点をよく留意した上でお進みください。お読み上げます。

晴天也

「あー、あー」

白い石材が敷き詰められた広場を前に、極卒は壇の上で意味のない音を拡声器へと吹き込む。

開始予定時刻までおよそ一時間、前方にはまだ彼の声を聴く者もなく、ただ数人の部下達が準備のために忙しなく往来するばかりである。

「あ、あー」

念入りに、丹念に、声を出しては周囲に反響する音の具合を確かめる。彼にとって、演説前の準備は演説そのものよりも重視すべき行程といえた。その上場所が場所とあつては、なおさら怠るわけにもいかない。

近頃はもっぱら各地に点在する基地に赴いて、軍部の士気を上げるために喉をすり潰すことがほとんどだった。今日のように屋外で、しかも一般の民衆を相手にすることは実に数カ月ぶりのことであり、音響の勝手もいろいろと違ってしまつたのである。

官邸前の広場にて演説を行うと決定した理由には、疎かにしてしまつた彼らの支持を高めかつ保つ必要性ももちろんあつた。だがもう一方では彼女　今この時も極卒の帰りを待たされている、あの目付きのよろしくない少女が自分の仕事に興味を持っていたようだったから、という動機が働いてもいる。

振り返れば背後にそびえ建つ邸が、黒い格子の正門を隔てて視界

を覆う。数ある縦長の窓のうち、住み慣れた執務室にあたる所にだけ、小さな人影が頭を覗かせているのが見えた。

まだ始まってもないのにせつかちな娘だ、と極卒はその口の端に苦笑を浮かべる。そうするようにと言いつけたのは他ならぬ彼自身であったのだが。

たとえ少女の件がなくとも、近いうちに上記のような理由から公衆演説を行うことはあっただろう。しかしその場所に官邸前を選んだのは、ひとえに彼女のことを考慮しての結果だった。

外に連れ出すこと自体あまり好ましく思えないものもあるが、それを差し引いても公衆の面前で少女を傍に付けるのは、複数の意味で危険な行為だ。

厳格な独裁者が子供を従えては彼に対する評価に支障をきたすだろうし、少女の身に危険が迫る可能性も格段に跳ね上がる。それゆえに極卒は、あの部屋からも辛うじて見たり聞いたりすることができるこの場所を会場に指定したのだった。

前方へ向き直るついでに、空を見上げる。淡い青が街の果てまで広がる下を、手で干切ったような綿雲がそよ風に煽られ悠々と漂っていた。

絶好の、いや舌好の演説日和かな。くだらないことを思っている一人にやつきながら、極卒は最後の確認をするべくもう一度、拡声器を口にあてがう。

「本日は、晴天なり」

開演の時間が近づき、石畳を境として広場の前を仕切っていた口ブが外されると、外側に集まっていた人々は「待て」を解かれた犬よろしく一斉になだれ込んで来た。とうに準備を終えて陰からそ

の様子を見ていた極卒は、久方ぶりの大人数の予感に少しばかり気持ちは昂らせながら、手元の拡声器に目を落とす。

傷一つない胴体は赤く塗りあげられ、丸く広がった先には持ち主の顔を模したと思われる悪趣味な模様がべったりと貼られている。大きな口の部分にのみ金属の網が張られており、そこから拡大された音声が発出されるようになっていた。

「ひどいものだ」

そうして喉からこみ上げる笑いを手の甲で制し、彼は開演の合図が空の高くへ吹き鳴らされたと同時に、足を踏み出すのであった。

のどかな気候を打ち消さんとする熱気と期待の前を行き、ゆつくりと段を踏んで演壇に上る。訓練仕込みのきれをもつて三時の方向へ体を回し、真正面から大衆と対峙して全ての人が自分と向き合えるように手を振れば、彼の一挙一動に歓声は度々温度を高めて波を生んだ。

盛大な祭りを思わせる騒々しさも、極卒が象徴である拡声器を構えたとたん水を打ったような静けさに移行する。口を噤んだ彼らはすでに、それぞれの神経を両目と耳に寄り集め、揃って支配者の言葉を待ちわびているようだった。

それでいい。そうやって師でも迷信でもなくあらゆる指針をこちらに求めていればいい。極卒はそのための存在といっても過言ではなく、また彼自身、誰よりもその立場を承知していたのだから。

滑稽としか言えない光景を細めた目でもう一度だけ見渡してから、静かに息を吸った。

「諸君」

置くように放った声が、白昼の広場にこだまする。

「本日はまず、この数カ月という長きに渡って顔を出さなかった事を心より謝罪させて頂きたい」

ありきたりな前振りから始まった彼の語調は、しばらくの間そのままの落ち着きを保って戦況の報告へと移っていく。

外見相応の知能しか持たぬ彼^がの少女は、今頃退屈してしまっているだろうか。刹那首を回して後ろを見てやりたい衝動にかられたが、きつとあの可愛いげのない視線がまだ自分の背を射ているに違いないことを信じてひとまず思い止まった。

毎日のように繰り返さねばならない仕事だからこそ、一辺倒であってはいけないというのが極卒の信条である。彼は様々な演説の構成を、状況に合わせて使い分けられるよう心がけていた。今回の場合は目的が目的だけに、できるだけ馴染みやすい言葉で、頭の中にすんなりと入り込めるような展開を予め心中に描いておいてあったのだ。

とは言え演説という行為から一つの快楽を得る体質の彼では、どうしても程よいところで歯止めをきかすことができないのも常である。現に今も段階を踏んだはいいが自分の熱を抑るまでには至らず、演説は見る間に高揚していった。

極卒の口から放たれた声が、極卒の顔をした拡声器の口を通過して叫び出される様はいかに奇妙なものである。それを確かめる術もない彼は、ただ己に食い入るような目を向けて興奮に雄叫ぶ聴衆たちの心境を察して楽しむ他はない。そうやって自身もまた、意図せず漏れてしまう笑い声とともに彼らの志を煽っていくのである。

この頃にはもう、背後の邸に置いた少女のことなどすっかり忘れてしまっていた。

宴もたけなわといったところで、ふと人垣の中から合間を縫ってこちらへにじり寄ってくる人があるのに気付く。それも一人ではなく、広場のあちこちで似たような動きが確認できた。

極卒は一通り状況を把握すると、相変わらず演説に夢中な調子を装いながら密かに左手を腰の方へ持つていく。体の前にある演台のおかげで、下の人々はその動きに気付いたとしてもただ腰に手を当てたとしか認識することはないだろう。

正門沿いに左右に広がって待機していた部下たちも、皆すでに張り詰めた目付きで抱えた銃に左手を添え、構えに入る機会を窺っていた。軍帽の下から一人が指示を促す視線を寄越してきたが、極卒はそれを顎で否定してまた何もなかったように、にやついた言葉を民衆へ吐きかける。

見たところ不審者の数はそう多くないことだし、それぞれの位置もまばらで、ここにたどり着くまでまだ相当な時間を要しそうな者も見受けられた。

実戦というものにあまり縁がない身でも、この程度であれば多少は相手ができよう。左腰の柄を握る手に、力を込める。

最前列左寄りの方から、初めに人混みを脱けた青年が何やら銀に光る物を両手で構え、周りとはまた質の違う雄叫びを上げた。それに合わせて左手で軍刀を引き抜き、演壇に駆け上ろうとするその男の胸をめがけて力の限り突き立てる。

握られていたナイフは目標へ達する前に持ち主の手を離れ、階段に敷かれた絨毯を虚しくも傷つける。青年は自らを絶命に至らしめた刀とともに膝を折り、やがてどうと音を立てて崩れ落ちた。その間に拡声器を持つ手を左に変え、極卒は右腰に吊っていた銃を抜いて安全装置を解除する。会場は突然のことに一時深閑としていたが、そうかと思えばすぐに火がついたような盛りを取り戻していた。

目の前で人が死んだというのに、逃げ出そうとする者は誰一人として出なかった。つい先ほどまでの演説によつて異常な精神状態へ誘導されてしまつていた民衆は皆、口を揃えて彼らが統率者を煽るばかりであつたのだ。

男が倒れてからそう間髪を入れずに、今度は反対の段から誰かが怒号を上げて迫ってくる。それを振り向き様に拳銃で撃ち抜き、更に続々と出てくる反逆者たちに対しても何度か発砲しつつ、再び拡声器を構えて声を張り上げた。

「静粛！」

今の今まで極卒を声の限りに応援していた群衆の動きが、ぴたりと停止した。しかし彼の命を何としてでも奪おうとする者達だけは変わらずそれぞれの武器を手に演壇を目指す。

最初の男を刺した際に知つたことだが、彼らは皆両耳に詰め物をしてるらしかった。通りで言うことを聞かぬわけだ。

微かに笑みがこぼれてしまふ。彼らの浅はかさが、呆れを通り越して憐れにすら感じられた。

「我が親愛なる同志たちよ、私は罪なき者を巻き込むつもりはない」
壇に上がるうとする者の一人が、より良い武器を求めて死体に突き刺さつたままの軍刀へ手を伸ばしたのに感付くと、極卒は一旦言葉を切つて銃を収め、その場所へ体当たりをするように転がり込んだ。

周囲が不意を突かれている内に柄を掴み、引き抜く勢いに任せて体を捻り一閃。腹の辺りを裂かれてもがき苦しむ彼らを前にゆっく

りと立ち上がり、左手で強く握った拡声器を、再度口にあてる。

「命が惜しくば、早々に立ち去りたまえ！」

次の瞬間、官邸前はまたも壮絶な騒ぎの渦に呑み込まれた。極卒の言葉に従って、聴衆が一斉に広場の入り口へと押し寄せたのである。

彼に従うことを良しとしない人々はひたすら逆流を耐え忍び、やがて彼らと軍の人間だけがその場に残されていた。

「よーい」

耳を突くハウリングと声とで我にかえった反逆者たちが音の出所を辿れば、いつの間にか、何事もなかったかのような出で立ちで演壇に立つ極卒の姿が目に入る。

その顔に浮かんでいた笑みは、実に彼らしく歪なものであった。

「撃て！」

ボクに逆らうヒト達なんか

生きていたって仕方がない

ただ一人の言葉を合図に、無数の破裂音が広場を飛び交った。

正面から腹を撃ち抜かれ、あるいは顔を抉られ、発砲と跳弾とが耳障りな伴奏の中で激しく踊らされる罪人達の珍妙な動きを見下し、極卒は他より一段高いその場所から、腹を抱えて強烈な笑い声を振りまいた。

つい数分前まで演説会場であったはずの場所がようやく本当の静寂を取り戻したとき、数十の屍が点々と散らばる石畳には、溝を伝って流れた赤が、幾つもの網模様を描き出していた。

後片付けも骨が折れようと部下を不憫に思いながら、未だ治まらぬ笑顔に浮かんだ涙を指で拭う。笑いすぎたのか嫌に腹が痛んだ。

いい加減に演台を離れるべく踵を返せば、黒がねの格子に遮られた門の向こう側に、ある人物が立っているのを見つけた。

官邸の窓から見ているように言ったはずの少女が、じつと極卒を見上げていたのだ。

「おや、来ていたんだ。外に出てはいけないと言ったのに」

軽やかに段を下り門に触れようとすると、今更ながら自分の手が朱あけに汚れていることを知り、思わず見入ってしまう。

「……あなた」

消え入りそうな声を聞き、改めて相手を見た。眉間に皺を寄せる彼女の目には、怒りとも恐怖とも取れる何かが漂っているようだ。

「人を、殺したのね」

少しおどかすつもりで更に歩み寄ってみると、少女は振り返り血に濡れた極卒に対して体を小さく震わせた程度で、それ以上身動きもしなかった。

普段は大きいばかりで大した色味もない灰の右目が、今は晴天の影響か仄かに青を含んで見える。ああ上空はなんと平和なことか。死を引き受けるのはいつだって地上の役目だ。そう実感したら吹き

出さずにはいらなかった。

「おまえはボクを裏切らないね」

それは彼なりの素直な感想に過ぎなかったのだが、少女には脅し文句の一つにでも聞こえただろうか。

吊り上げた口にまで入り込んでいた鉄臭さを嚙下しつつ、それはそれで構わないと思う極卒であった。

晴天也（後書き）

極卒らしさを追求してみた話

極卒のことを考えすぎてなのこの出番がなくなるといふ本末転倒な
事態に陥ってしまいました；

これくらいなら全年齢でも大丈夫だと信じています

さくらそつ

黒い軍服を着た男たちが、数人がかりで穴を掘る様を、少女は極卒の隣から遠巻きに眺めていた。

ふと横に目を遣れば、極卒が自分とは別の方向へ、顔を向けていたことに気付く。彼は、作業を進める人々に寄り添う形で立ち並ぶ、桜の木々を見つめていたのだ。

季節柄、満開の花を咲かせているそれらは、空気の動きとともに、少しずつ、薄い色の花びらを切り放していく。

口角を吊り上げるように引かれた紅のせい、一見笑顔にも見える極卒の表情は、その実、決して晴れやかなものに見えなかった。

「ごくそつは、桜がきらいでしょう」

少女は直感したことをそのまま口に出してみる。直感とはいえ、ほとんど確信に近かったので、あえて言葉尻を上げることはいしなかった。

断定を投げかけられた極卒は、頭の向きはそのままに、大きな目玉だけを動かして少女を一瞥する。それから桜の枝先へ視線を戻し、特に動揺した様子もなく、口を開いた。

「何故、そう思う」

「あたって？」

再び極卒に問いかけると、今度は黙々と穴掘りをする彼の部下た

ちを見遣り、少しばかりの間をあけてから、ようやく答えてくれた。

「はずれだよ」

全長一メートル以上はある楕円形の穴が、焦茶色の地肌に着々とあけられていく。そう柔らかくもない土地だったが、土を掘り返す軍人たちの中で、極卒に文句を言う者は一人としていない。

それほどに極卒は畏れられる存在であるということなのか、あるいは、彼ら自身、この作業に一種の誇りを持っているということなのか。

「そうなの」

少女は特に落胆もしなかった。いくら自信があつたとしても、直感とは得てして外れてしまうものだ。

ある程度の数が掘られたあたりで、桜吹雪の向こうから、一台の荷車が姿を見せた。荷台が白い布に覆われているため、積みまれているものを直接見ることはできない。

しばらくぶりに、そして唐突に極卒が話し出す。その語り口の静かさは、寝物語でも始まるのかと思えるほどだった。

「割と有名な話だが、美しい桜の根本には、死体が埋まっているという」

「……はじめてきいたわ」

少女は思わず、空に大きく伸ばされた枝を見上げた。可愛らしい

花を付けるこの木の、どこにそんなおぞましい要素があるのだろう。

「根から死体の血を得ることで、桜の花弁はより濃く、美しく色付くんだそうだよ。まあ、それこそ根も葉もない噂だが」

ひょっとして洒落を言ったつもりか、と少女が横目で盗み見ても、そこには相変わらず、引き結ばれた赤い口が見えるだけだった。

極卒にしては珍しい表情でもある。

「しかしそれなら、私も同じだ」

穴の近くで停止した車の荷がほどかれ、大きな布が取り除かれる。しかし、荷台に見えるのはまたしても布の山だった。一つ一つ、小分けに包まれた細長い塊が、大きな月見団子よろしく積み上げられているのだ。

先程までの真っ白だった布と違い、ところどころに染みのような、赤黒い汚れが目につく。

「この華々しい地位も、今の私自身も、多くの屍の上に、成り立っているのだから」

男たちが二人一組で、荷台から薄汚れた塊を一つずつ降ろしている。それぞれ穴まで抱き運び、桜色の花びらが自然の絨毯を作っている上に、そつと横たえた。

布にくるまれた『それ』は、ちょうど、穴の大きさと深さに収まるサイズだった。

傍観を続ける二人にも桜の花びらは降りかかり、小さな一片が、少女の銀の髪に留まる。

そのことに気が付かなかった少女は、いきなり迫ってきたモノト
ーンの腕に、思わず背筋を凍りつかせてしまった。そんな反射的態
度にも構うことなく、極卒は黒く塗った爪の先で、少女の頭から花
びらを摘まみ上げる。

同時に髪の毛も数本ばかり引つ張られた少女は、痛い、と抗議の
声を上げるも、聞こえなかったのか無視なのか、彼は値踏みでもす
るかのように、桜色の欠片を陽に透かすばかりであった。

怖がったことは悪く思うが、あからさまに髪を引つ張ることもな
いだろう。少女がいじけた目で極卒を睨んだとき、

「桜には、少なくとも親近感が持てる」

ぼそりと呟く声が聞こえた。

「……ごくそつは、桜とにているから、桜がきれいじゃない、とい
うこと？」

「そうだよ」

「じゃあ……」

あれほど荷台に積み上がっていた布の塊は、今や軍人たちの手に
よってすべて穴の中へと運ばれ、それぞれ上から土をかけられてい
る。

先程まで穴だらけだったはずのこの土地に、今度は高さ二十セン
チメートル程度の、小さな山々が連なるうとしていた。

「それなら、やっぱり、ごくそつは桜がきれいじゃない」

咎めるような口調が意外だったのか、極卒はついにこちらへ頭を向けた。少女も顔を上げ、彼の底知れない暗闇を湛えた眼差しに応じ、漠然とよぎった考えを隠して口を開く。

極卒は、悲しいと感じたことがあるだろうか。

「だって、ごくそつは、ごくそつのこと、きらいでしょう?」

顔を見合わせている相手から、返事はない。

けれどその表情にわずか、本当に些細なものだったが、初めて変化が起こった。

目を、細めたのだ。

薄桜の中に浮かんだそれは笑顔のようにも見えたが、大袈裟な口紅が錯覚を引き起こしているだけで、実はしかめっ面をしたのかもしれない。

どちらにせよそれは少女にとって、極卒の頑固だった顔面を崩せたという、ただそれだけのことに変わりなかった。

足音が聞こえて前を向けば、軍人の一人がこちらへ歩み寄ってくる。彼は極卒の前で足を止めると、迫力さえ感じさせる程の敬礼を披露した。

「戦死者の埋葬、完了致しました!」

「わかった」

静かに顎を引き、先導する男に続いて足を踏み出した極卒の後を、

少女は小走りで追いかけるのだった。

桜並木を背に、極卒と彼の部下たち、そして少女は整列する。平地の状態から穴を掘り、布で包んだ遺体を埋葬して、土を盛っただけのシンプルな即席墓地が、彼女らの眼前に広がっていた。

時が止まったような静けさの中でも花は止むことを知らず、盛り上がった地面に、桜色の模様が描かれていく。

「黙禱」

静かな、それでいてよく響く号令とともに、極卒たちは祈りの体勢をとり、少女も俯って目を瞑る。しかし、この地に眠る人間にとって少女とは、国のために戦った仲間でもなければ、顔見知りではない。それはお互い様の事実だ。何を心から祈れるだろう。

こっそりと顔を上げ、仰いだ極卒の横顔はなお、志半ばで息絶えた自軍の兵のために、瞼をかたく閉ざしている。

彼の背中にいつの間にか、桜の花びらが付いていた。よく見ればその色はとても淡く、むしろ白に近い。

少女はあることを閃いてもう一度目を閉じる。極卒から聞いた、噂話を思い出したのだ。

故郷から離れたこの地で、たとえば彼らが、何一つ結果を残せなかったのだとしても。

たとえば彼らが、誰の心にも残れなかったのだとしても。

せめて　ここの桜だけは

わすれないでいて くれますように

今日よりも濃く、美しく、花の色を染め上げて。

これだけの人が、この世界で、必死に生きていたのだということ
を。

それこそが、少女にもできる、心からの祈りと思えた。

さくらぞう(後書き)

桜草ならぬ桜葬の話

書けば書くほど極卒が自分のイメージからかけ離れていく不思議…

獄炎の上

「壮观だ……」

それは感嘆のため息と共に、極卒の口からすべり出た言葉であった。

「そうかしら」

爆音と様々な騒音が入り乱れるなかでも、少女の否定的な呟きを聞き取ることには難はなかった。

何せ彼女は、シートに腰を下ろした極卒の腿の間で、棒のようにつつ立っているのだから。

その表情を知ることができないが、色素のない髪が、ただでらたらと赤い光を反射するさまだけでも、極卒の心をやたらと昂らせた。

「上からものを見る気分はどうだ。これの乗り心地もなかなかのものだろう」

「アクシユミよ。ひどいアクシユミ」

悪趣味とは二人が搭乗している兵器を指すのか、はたまたその兵器を操っている極卒の嗜好を指すのか。

ここは高さ十メートルはあるつかという巨大な人型兵器の上。その頭頂部に設けられた、一人用の操縦席である。

半円形の頭部の前面には、極卒お得意のにやりとした表情がでか

でかと描かれており、確かに少女でなくとも悪趣味と感じられるデザインではあった。

それが通った後には火の道ができ、これから通ろうとしているところ、そしてその周囲までもが、兵器による発砲や、戦闘機に乗った部下たちの爆撃で、既に火の海と呼ぶにふさわしい有り様となっている。

一步、一步と巨大な足を踏み出すたびに、操縦席にいる極卒たちも大きく上下に揺すられたが、目の前の少女は怖がったり体勢を崩したりすることもなく、退屈そうに髪をなびかせるばかりだった。

彼女の様子に気付かぬふりをして、極卒は高笑いを繰り返す。

あちこちから耳に飛び込む、盛大な崩壊の音は、彼の背筋を心地よくあわ立てた。

「見てごらん。あそこに見える炎の色など美しいぞ。他のどこよりも赤々と燃えている」

「火はきらい。かこまれていると、自分がもやされてるようなきもちになるわ」

「おまえはつまらないのかい」

少女は返事をしない。いつも留守番では退屈だろうと連れてきてやったのに、なんとつれない態度だろうか。

自然と口の端が吊り上がってしまうのは、どこぞから込み上げる悦びゆえか、煮え切らない苛立ちゆえか。当の本人ですら、もはや把握はできなくなっていた。

鉄で固められた足の裏が、一軒の民家を粉々に踏み壊した。轟音

にまぎれて極卒の奇声が甲高く響き、暗紅色の夜に溶けていく。

「ひよ！ おい、今踏んだ家が誰のものか分かるか」

「別に、しりたくないわ」

「奴の家だよ。ボクを裏切った愚かな男！」

そう。この家こそが、彼にとって本日の最たる目的であった。

敵に寝返り、軍の情報を流した憎むべき一兵。今ごろは狭い処刑場の中から自分の故郷が滅ぼされていく映像を、手も足も出せず、顔を背けることも耳を塞ぐことも許されずに見せつけられていることだろう。

そして全てが終わった後に、彼もようやく家族の元へ逝くことができるのだ。

裏切りの罪は、それ程に重い。

極卒は笑った。とても長い笑いだった。あまりの長さに、少女の物憂げな片目もこちらを伺い、またすぐに前を向く。一瞬の瞳の輝きが鋭い閃光を思わせ、その美しさがまた、彼の馬鹿笑いに拍車をかけた。

ひとしきり笑い、がらんとした極卒の頭に残っていたのは、

「どっしり」

という言葉であった。

そして一度口にしてしまうと、今度はその言葉ばかりが彼の口からとめどなく溢れ出してくる。しかし、少女が再び振り返ることは

なかった。

「ねえ」

操縦桿から手を離し、華奢な撫で肩に両手を置く。小指がはみ出る程に小さなその肩はびくりと大きく震えたが、それきり堪えるようにじっとしていた。

「どうして分からないのかなあ」

それが誰に対してなのか、そもそも問いかけであるのかどうかさえ、極卒にもわかりはしない。

「どうして、分かってくれないのかなあ」

肩を掴む手に力を入れても、少女が抵抗を見せることはなかった。その代わり、彼女は前を向いたまま、特に期待もしていなかった返事をくれる。

「そんなの……わがままだわ」

微かではあったが、決して恐怖に震えた声ではなかった。

たまらず、目を細める。

「ああ、知っているよ」

そのままぐいと肩を引き寄せ、少し近付いた頭の上に、軽く顎を乗せる。極卒には、少女が抵抗をしないことが分かっていた。

たとえば嫌がったり怖がったりすることがあっても、彼女は決して

それらを拒絶しようとはしない。自分を守ろうという意思がないのだ。

無数の火柱が焼き付いた目を閉じ、焦げ臭さと冷たい髪の毛の臭いをかき混ぜながら、そっと口を開く。

「この世で一番、身勝手なワガママだ」

極卒の囁きは、少女の耳に間違いなく届いただろう。

けれども彼女は灰の右目に火の光を反射するばかりで、もう言葉を発しようとはしなかった。

獄炎の上（後書き）

極卒と言えばロボだよね、という話

笑える材料でいかにシリアスな話を書けるか、と密かに挑戦してみました

つくえのした

二人で囲むにはいささか大きすぎるテーブルの端で、少女は食器を持ちもせず、ずらりと並ぶ料理のうち、皿に丸々盛られた甲殻類の、黒い目玉を睨みつける。

「食べていいんだぞ」

と遠い向かい側から極卒が促してきても、膝の上に置いた手を上げることはない。

食欲が湧かないのだ。

そもそも、少女は食というものにまるで興味を持ったことがなく、かつ人に見られて何かを食べるというのも、大の苦手であった。皺を寄せた眉間とともに、視線を上げる。

「なんのつもり」

極卒だって、これくらいのごときは充分知っていたはずだ。あの意地悪さを凝縮したような笑顔こそが、その証拠だろう。

少女が睨むと、相手はますます愉快そうな顔をした。そんな彼も、テーブルに肘をついて手を組んだきり、食事に手を出してはいない。

妙な静けさと、ソースやら香草やらの食欲を誘うであろう香りばかりが、食堂に充満していく。

あまりに静かだったので、ノックの音が静寂を打ち破ったとき、少女はその音量に思わず震え上がってしまったほどだった。

一方の極卒は特に驚きもせず、平然と席を立ててドアへ向かう。

ノックをしたのはこの人間らしい。二三言葉を交わすと、極卒は椅子の上から様子を窺っていた少女に歩み寄り、少し抑えた声で言った。

「来客だ。自分から食事に誘っていたのを、すっかり忘れていた」

状況把握が追いつかないまま、こちらも相手に合わせて小声になる。

「ここにくるってこと？」

「ああ。既にすぐそこで待っているそうさ。時間がない、彼との食事が終わるまで、おまえはテーブルの下に隠れているんだよ」

常識外れな言いつけに、少女は耳を疑った。と同時に、極卒の態度もどこかおかしいと勘繰り始める。予想外そうな口振りの割には、機嫌を損ねているように思えないのだ。

その笑顔はどこか困った風にも見えるが、まだまだ余裕が含まれている気もする。

元より、彼は緊急事態に強い方ではなかったはずだが。

「なんの、つもりなの」

先刻と全く同じ質問をしても、ただ、意味深長な笑みを広げるだけ。

「私とその椅子に座るから、相手に見つからないよう、側でじっとしているんだよ。靴は脱がせてくれても構わない。蹴ってしまっは大変だからね」

こちらの都合などお構いなしに話を進められ、更には肩を捕まれて下へ下へと押されてしまえば、少女は抗議する隙さえ見付けられず、渋々テールブルクロスをくぐるしかなくなってしまう。

完全に潜りこんだところで振り返ると、布をめくってこちらを覗いていた極卒のにやけ顔があつた。目が合った途端に布を下ろされてしまい、床との間にできた僅かな隙間からは、もう彼の足しか見えなかったが、どうやらそのまま、ドアの方へ向かつたようだ。

「ようこそ、お待ちしておりました」

嘘ばかり、と少女は磨き上げられた床に、こっそり陰口を吐き捨てる。

客人と思われる人物の足が向こうの席に留まり、次いで極卒も、こちら側の椅子に腰を下ろす。少女はその足の間に座りこんで、すっかり呆れてしまつていた。

挨拶もほどほどに、二人と一人の食事会が始められ、頭上から食器と食器のぶつかる音が頻繁に降ってくる。さっきまで自分と同じく一口も食べていなかった極卒も、今は黙々とディナーにかじり付いているようだった。

何かのはずみで傍らの足が動くたび、少女はこの硬そうな踵に踏みつけられるのでは、とぞっとしてしまう。このままではまずい、本人の了承は得ているのだから、と心を決め、白いラインが入った黒光りする革の縁に手をかけた。

こんなに長い靴は脱いだことも履いたこともないが、靴紐もフラスナーもないところを見る限り、単純に引っ張れば良さそうだ。

いざ脱がそうとすると、極卒も食事を続けながら軽く足を浮かせ

て協力してくれたので、何とか、大きな音を立てずにやり遂げることができた。

さすがに素足ではなかったが、ブーツを脱いだ彼の足など見たことのなかった少女は、初めて目にした変哲のない軍袴ぐんこの裾に、変な珍しさを覚えてしまう。

脱け殻となった靴を床に寝かせ、改めて横を見た。椅子が高いのもあって、足は爪先が床に付くか付かないか程度の長さになっている。その様がまた滑稽に思えて、少しだけ、得をしたような気にもなった。

しかし、たかが足では物珍しさもあっという間に失せてしまい、いよいよ慣れ親しんできた退屈が押し寄せてくる。彼女の興味は必然的に、正面に見える足の持ち主へと移っていった。彼も軍人なのだろう、極卒のものとよく似た形状のブーツを履いている。

ちょうど食事が一段落したのか、向こうから聞き覚えのない声が響いてきた。

「ああ、つい夢中になって食べてしまいました」

若くはない、貫禄を感じさせる穏やかな声だ。それに続いて、すぐ上からにこやかな声が降りてくる。

「口に合ったなら何よりです」

「まさか閣下からお食事に誘って頂けるとは、夢にも思いませんでしたよ」

「本日は多忙の中感謝致します。貴殿とは一度、話をしておきたいと思ったもので」

凝り固まった社交辞令が、テーブルの上で次々と交わされる。敬語を使う極卒は、何とも言えない胡散臭さをかもし出していた。

「恐悦至極です。私としても、日頃より閣下の御意見を是非、お窺いしたいと考えておりました」

いつの間にか、左肩に極卒の左足が乗っている。とはいえ特に重くもないので、今は気にしないことにした。

「先日、我等が同士の郷里を、焼き払ったそうですね」

そのときになって、少女は食堂を満たしていた、不穏な空気の流れに気が付く。

いつからだったのかは分からない。しかし確かなのは、たった今、客人の声から好意的な響きが消えたということだ。

極卒の足がゆっくりと、触れていた肩をさするように動きだす。

「その通りです。しかし心を痛める必要はありません。彼は我が軍の情報漏洩に加担した、裏切者なのですから」

「当然の粛清、であると」

「まさしく」

二人の会話内容を把握できない少女は、険悪な雰囲気といえど、どうしても暇を持て余してしまう。左肩を前後に移動するものの感覚が、少しずつ、気になるようになった。

すり、すり、と耳元で繰り返される微かな音。大事な話をしてい

るはずなのに、この男はテーブルの下で何をふざけているのだろうか。

「ですが本当に、その故郷まで巻き込む必要があったのでしょうか」

客人の声音は依然として穏やかながら、一本のしっかりとした芯を感じさせる。

だが、極卒もそれに怯むような人間ではない。

「我等は軍人です。死ぬ覚悟など常に出来て当然の身、ただの死刑では無意味でしょう」

「私は、それが閣下個人の復讐心に因るものと思えてなりません」

黒い右足が、少女の体の前に回される。左足も肩から離れてそれに交差し、今にも首を絞められそうな形になった。

力任せに引き寄せられ、仕方なく、音を立てないよう後退する。

あまり玩ばれるのも癪なので、せめてもの仕返しにと、彼の足首を掴み、その甲に『なにをするの』と指で文句を書いたが、無論、何らかの返事が返ってくることはない。

「誤解ですよ。私はこの軍に属する者に対して、死は脅しに成り得ないと考えました。それ故に、少々大袈裟な手段を採ったまで。自身の所為で愛する人をも失うと知れば、以降はそう簡単に裏切る者など出ないでしょう。軍の団結には、多少の粛清も不可欠なのです」

流暢に話す一方で、足には相当な力が入っている。少女は楽な姿勢をとることもできずに全身を緊張させていたが、そろそろ限界を感じていた。

足の裏をくすぐれば、少しは緩めてくれるだろうか。
閃いてしまったが最後、先の事を考えてためらうほどの余裕はなかった。

一つ息を吐き、ゆっくりと、目の前の土踏まずへ指を近づけていく。

ちょうど、先が触れたか触れないかというところで、

がつ

ほんの一瞬、テーブルとその上の食器たちが、一斉に音を出して震えた。

極卒が、驚いて足を上げた拍子にぶつけてしまったらしい。

「どうかされましたか」

客人の訝しむような声。これはまずいことをしてしまったと、少女は息を呑んで高鳴る胸を驚掴む。

「いや、ここで飼っている猫のようです。いきなり足元を横切られたので、驚いてしまいました」

言い訳と一緒に、今度は足が背中を強く小突いてきた。

その意図を理解し、こればかりは自分が悪かったと反省もしていた少女は、恐る恐る、か細い声で猫の鳴き真似を試みる。

「……にー」

「確かに、どこからか鳴き声が聞こえますね」

どうやら上手く誤魔化せたようだ。ひと安心すると、背後から頭をぐしゃぐしゃに撫でられた。

撫でられること自体は嫌いではないが、足でとなればどこか屈辱的なものがあり、あまり良い気はしない。

乱れる髪を整えながら、手近の足を捕まえ『いや』と書く。頭の重みは、意外にもあっけなく退いていった。

「それはともかくとして……」

こうして、二人の話題は何か元の軌道に修正され、少女には次なる退屈が降りかかるようになった。けれどももう危険な行いはできないと悟り、今度こそは大人しくしていようと決意する。

その後も、客人が挑戦的な言い方をするたびに、極卒は口では穏やかに対応しつつ、足では少女の肩を揺すってきたり、背中や脇腹をさすってきたり、がんじがらめにしてきたりなどの不可解な行動を繰り返した。

ある程度はされるがままにしておき、度が過ぎていると感じたときだけ、足の甲に『いたい』や『くるしい』とメッセージを伝える。そうすれば少しは力を緩めてくれるとわかったので、こちらもこれを繰り返して、何とかその場をやり過ごしていた。

「本日は、お誘い頂きまして誠に有難う御座いました」

その言葉で少女は目を覚ます。話を聞いているうちに、眠ってしまったようだった。こんな状況でよく寝られたものだ、我ながら感心してしまう。

正面に人の足は見えず、そういえば体に負荷がかかっている感覚もない。振り返ってみればすぐ脇に極卒の足があり、ブーツを脱が

せた直後のように、大人しく爪先を床に付けていた。

「がちゃん、とドアの閉まる音を聞き、客人が帰ったらいいことを知る。次いで、上から長い溜め息を吐き出す音もした。」

「終わったの？」

テーブルの外に向かって、声をかける。

「ああ。面倒なものだね、古株の部下というのは」

同意を求められたところで、少女に答えられるわけもない。

「だが、こういった場でこそ短気は禁物だ。指導者とは、単に恐ろしいだけではないけない」

「……ごくそつには、むりなはなしね」

「そうとも。だから」

極卒の腿を覆っていたテーブルクロスが大きく揺れ動き、ゆっくりとめくれ上がっていく。

幾分明るい布の外、数時間ぶりに見えた彼の顔に浮かんでいたのは、にたあ、と広がる、悪趣味なにやけ口だった。

「おまえがいて、助かったよ」

ああ それで

右目を大きく見開き、少女はようやく理解する。

自分がああ、音のない晩餐会に招かれた、本当の理由を。

つくえのした（後書き）

利用されたっぽいなこの話

足問答に憧れて。何か違う気もします

「客人」は既存のキャラクターにすべきか迷いましたが、今回はやめておきました

黒蝶（前書き）

この話には微量ですが流血表現が含まれております。苦手な方は
ご注意ください

黒蝶

大きな花束を携えて帰ると、出迎えた少女は灰色の瞳を丸く輝かせた。

「どうしたの、それ」

「仕事先で押し付けられた。余計なことを」

先刻、自分にこれを手渡してきた人間の、あの悪意の一片もないような笑顔を思い出し、虫酸が走る。

花を愛でる気持ちはわからなくもないが、根から切り離れた残骸を人に渡し、あまつさえそれを善意の証明たろうとする世の常識が、極卒には理解しがたいところであった。

「でも、きれいよ」

「それを言うなら一時間前はもっと綺麗だったぞ。二時間前なら尚のこと」

その上この気温の高さ、いかに慎重に扱おうとも、根を奪われた花々はどの季節より早く萎れてしまう気がする。

とはいえ、それほど気を使って持ち帰ったわけでもないが。

「もっとよくみせて」

と頼まれ、床に向けていた束の先を、少女と自分との間に持って行ってやる。

それはいかにも夏らしいもので、大輪のヒマワリと色の濃いダリアが何本か、見知らぬ小花と一緒にまとめられていた。

鮮やかな色のコントラストは目に悪いほどだが、改めて見るとやはり、当初に比べて元気をなくしているようだ。

「渡される方の身にもなつてほしい。私の部屋にこれを飾っておけるような物があるとでも、本気で思っているのだろうか」

苦笑とともに不満を吐き出せば、それまで興味津々に花を見つめていた少女が顔を上げ、不思議そうな顔をした。

「それなら、ちゃんとあるわよ」

思わぬ返事に、言葉を失う。それを見た彼女は愉快げに身を翻すと、壁ぎわの硝子棚へ、小走りで向かった。

あれは確か、仕事の関係で貰った骨董品などを、適当に詰めこんで飾っていた棚だ。満杯になって以来、もう長いこと触っていないものでもある。

少女はその扉をためらうことなく引き開けて、中から透明な細身の瓶を取り出し、極卒の元へ戻ってきた。

「ほら、これ」

差し出された水晶の胴には、透明な模様が細かく刻まれている。

確かに花を飾るための器らしい。

ほう、と感心の息がこぼれた。

「よく知っていたね。私なんかよりおまえの方が、余程この部屋に詳しいみたいだ」

「あたりまえよ。わたしはずっと、ここにいるんだもの」

何でもないような言いぐさとは裏腹に、少なからず誇らしく思っているのだろう、少女は小さく胸を張ってみせる。

悪戯心に火が点いた極卒は、にやける口を抑えようとせず、「だが」と言葉を繋げた。

「この細さでは、一つ飾るのが精々だろうな」

彼の言う通り、それは上下の端から中心に向かって内側へと湾曲した、細長い作りの、紛れもなく一輪挿しに分類される物であった。指摘を受けた少女もそのことに気が付いたらしく、しゅんとしながら手の内の花瓶を見遣る。

「おさらやポットならたくさんあるのだけれど、お花のピンはこれしかないの」

成功だ。こつそりほくそ笑んでから、再び協力的な態度になる。

「そうか。では仕方がない、この中から一輪だけ選び取って飾ればいいことだ」

腰を折り膝を曲げて、花束を更に相手の目線へ近づけた。

「さあ一つ、選んでくらん」

「わたしが？」

まさか選別を任されるとは思わなかったのか、花を向けられた少女は驚きの瞬きを見せる。

「そうとも。私のデスクに合う花を、おまえが選ぶんだ」

「……わかったわ。じゃあ」

静かに迷った末、彼女が指で示したのは、ヒマワリの次によく目立っていた、色黒のダリアであった。

「きよひよ、意外だ。おまえが黒い花を選ぶとは」

よくわかっているじゃないか、とまでは、敢えて口にしないでおく。

「ひまわりのほうがよかった？」

「いや、私にも苦手な色があつてね。黄色は二番目に嫌いなんだ」

「そうなの」

ああ、と返事をしつつ、極卒は東から少女の指したダリアを抜き取る。

しかし、一見黒っぽく見えていた花はその実、間近で眺めれば暗い赤色の集合体であることがよくわかった。

「赤、か」

自然と、眉間に力が入る。

独り言にも似た彼の呟きに、少女も改めて花束を覗きこんだ。

「ほんとうね。黒いお花の花びら、みんな赤いわ」

「赤は、一番嫌いな色だ」

「嘘よ。火はきれいって、いってたくせに」

「それが嘘だったんだろう」

注がれた疑惑の目を言葉で撥ね付けてやると、少女は理不尽さに機嫌を損ねたようだった。

正確に言うなら、全くが嘘というわけではない。ただ、常日頃いから毛嫌いしても、本物の炎を前にすれば無条件に腹の内が沸き上がってしまう、それだけのことなのだ。

そして何もかもが燃え尽きた後には、決まって氷雨のような嫌悪感と後悔だけが残る。それゆえに、極卒は火というものも好きではなかった。

「そんなに嫌なら、べつのをえらばせてちょうだい」

「いや、これでいい。私が黒くしてみよう」

気に入らない色なら、自分の色で染めてしまえば済むことだ。

ぐり、という鈍い音と鋭い感覚が、極卒の口内に走った。広がりだした喉を突く味が、やがて鼻腔にまで届き、刺激してくる。

もう良いだろうかと構えたダリアに口を寄せ、その花びらに向かって舌を出した。

刹那、様子を見ていた少女の肩が、びくりと大きく上下する。

「ごくそつ……なに、してるの」

「しあをかんあ」

一滴、また一滴と、伸ばした舌にまとわり付く液体が、赤黒い花びらへ伝い落ち、赤黒い露となる。

『舌を噛んだ』。その舌をしまわずに放った間抜けな答えはしかし、何とか少女にも伝わったらしい。

「そんな。だって……血だって赤だわ」

面白い反論の仕方をするものだ、と花から少女へ視線を移し、口角を吊り上げる。面白く思ったからには、応えてやらぬ訳にもいくまい。

極卒は一度、真っ赤に濡れる舌を引いた。

「初めは赤いかもしれないが、時間が経てば黒くなるものだろう」

話す内にも血は溢れ、口の端から今にもこぼしてしまいそうになる。その前にまた舌を出し、ダリアへ流しこんでから短い注文を付け足した。

「あまり喋らせるな」

再び作業に戻る。それでも、少女は疑問を口にしてきた。

「でも、そんなに。大丈夫なの」

今度はつまらぬことを訊いてきたな、と心配そうに揺れる右目を見返して思う。所詮は舌だ。噛み切ったのならまだしも、多少傷をつけたくらいで、命に関わるほど出血するはずもない。

口で教えてやるのが億劫になった極卒は、ただ黙々と、ダリアの赤に自らの赤を重ね続けた。

少女もこの無視に腹を立てた様子はなく、じっと、気味の悪いものを見る視線で極卒の舌を刺す。

恐ろしい顔をするなら、見なければ良いものを。そう思えどやはり、口に出しはしない。

見られている側としても、この状況に問題は感じなかった。

無数の棘のような花卉に、大方血が行き渡つたと判断したところで、極卒はようやく顔を上げる。止血も進んでいた頃だが、とりあえず、取り出したハンカチで口元を覆った。

「こんなものか。さて、どうなるかな」

「どうなるかわからないのに、やっていたの？」

片目を大きく見開く少女。細かな感情の別はどうあれ、今日の彼女は驚いてばかりだ。

「決まっているだろう。おまえは私が、花を好んで血染めにするような変態に見えるのかい」

「みえるわ」

即答だった。汚れていくハンカチの中で、己の口がにんまりと弧を描くのがわかる。

「口を濯いでくる。ついでに水も入れてこよう、花瓶をお貸し」

受け取った花瓶に水を差し、染めたダリアの茎を挿す。粘性の血液を帯びてしっとりしている姿は、誰が見ても不気味と感じられるものがあつた。

「これでお花がかたまつたら、もう枯れてしまうこともないのかしら」

極卒の傍らに並ぶ少女が、机の角に置かれた一輪挿しを見上げ、思い付いたように呟く。

「さあ。蠟でもあるまいし」

ふと横を向けば、ソファアの上に花弁を散らして横たわる、黄色い花束が見えた。包装紙ごと鷺掴んで拾い上げ、近くの屑籠へ、乱雑に投げ落とす。

紙屑に埋もれて咲くヒマワリも、それなりに趣き深くないことはない、と嘲笑する極卒であつた。

黒蝶（後書き）

個人的なダリア愛をぶつけてみた話。タイトルはダリアの名前の一つです

夏の花で言えば極卒は黒向日葵、なのは白ダリアが合うように思います

いじきしん

全身をくるむ布の外側で、蝶番の微かに軋んだ音を聞き、少女は極卒が帰ったことを知る。

遅くなるから寝ているようにと言われていたが、今夜はベッドに潜ってもしきりに胸がざわついてしまい、なかなか寝つくことができずにいた。

だから、こんな夜には必ず、彼が寝室に入ってくるのだ。

ドアの隙間から漏れる眩しさに瞼を上げ、絨毯を踏む硬い靴音が自分のすぐ脇で止まると同時に、寝返りを打って侵入者の顔を見上げる。相手は思った通りに驚いた。

「なんだ、起きてしまったのか」

おきていて残念だったわね、という皮肉を内心のみに留めつつ、寝起きを装い右目を狭める。

「わたしに何か？」

「おまえが寝ていると思って、折角だから一度は見てみようかと」

そこまで言うとは極卒は逡巡するようにそっぽを向いたが、やがて小さな笑い声をつだけ吐き出し、まあ気付かれたからには白状するが、と黒い眼をぎらつかせた。

「おまえの、左目をね」

少女は特に驚かない。隠されたものに胸をくすぐられ、その禁を破りたい衝動に駆られてしまうのは、人間である以上決しておかしいことではないだろう。

そして彼女は、その衝動を拒絶するほど非情な訳でもない。

「別に、かまわないわよ」

「おや、拒否しないのか。てっきり見られるのが嫌で隠していると思っていたのに」

「じつは、わたしもしらないの」

正直に答えただけなのだが、極卒は不思議で仕方ないようだ。

「鏡を見ればいいだろう」

それが全然、関心すら持てないのである。少女にとって左目が髪に隠れていることは五体が揃っているのと同様に当たり前であったし、右目だけの生活に不便を感じた覚えもなかった。

そう告げると、彼は軽く首を傾げたのち、口の両端をぐいと広げて面白がる。

「自分の顔も知らないとは信じられんなあ。こっちは好奇心が高まる一方だ」

ところが直後、その笑顔は一瞬にして消え失せてしまい、何か不思議なものを見たような目で口を閉ざしてしまった。

「……ごくそつ?」

少女にとつてもそれは意外な光景だったため、時間が止まってしまったのかと不安になりつつ声をかければ、そこでようやく我に帰ってくれたらしい。

「ん、いや、前にもこんな会話をしたような気がしてね。白昼夢というやつだ、今は夜中だけれど」

「……みせてあげないわよ」

「そう言うな」

体の右側に左手をつかれ、柔らかなマットレスが沈み傾くを感じる。真上を向いた少女の目と鼻の先で、廊下の明かりを背に受けた極卒が、その唇を赤く光らせていた。

「では、失礼するよ」

どうぞ、と返事をするまでもなく、白い右手が前髪に伸ばされる。長い中指の先が分け目に触れ、左頬の方へと押しやっていく。いつもは頑なに顔の半分を覆い隠していた髪も、人の手にかかってしまえば呆気なくそこを退いた。

「どう、わたしの左目。変なのかしら」

髪をどかしきつても口を開かない極卒に、何となく訊ねてみる。相変わらず興味は湧かなかったが、知れるものなら知っておいて損はない。

しかし、その問いに対する答えは返ってこなかった。

「おまえ、どうして。気付かないのか」

気付かないから訊いているのだが、これは現在の極卒に言ったところではないことか。

今や彼の表情は笑顔と遠くかけ離れたものになっており、これでもかと開かれた両目は反射する光もろともがくがくと揺れ動いている。

かつての少女ならば、その様子を驚き珍しがっていただろう。しかし慣れとは、全ての事象に訪れるものらしい。

少しくらいからかってみようかと、再び声をかけてみた。

「ねえごくそつ、しってるでしょ?」

顔の左一点だけに集中していた極卒の瞳が、どうにか、少女の視線とぶつかる位置に動く。

「コウキシンは、猫を殺してしまうんですって」

「そんな、言葉、何故」

やはり、と言うべきか、それは極卒にとって、少女が口にするだけでも驚きとなり得る科白だったようだ。切れ切れの音が、とても不安定に響いた。

彼に限界が迫っていることを悟り、せっかくだから答えてもいいかという気になる。

「だって」

けれど言い始めた次の瞬間、相手は目を閉じて力尽き、その場に倒れ伏してしまった。

左腕の圧迫をもろに受け、顔をしかめる。やっとの思いで這い出すと、少女は向きを変え、シーツに上半身を沈めたその耳に、口を寄せた。

だって あなたが いったんじゃない

六回目の あなたが いていたのに

行き場を失った返答を、届くことはないと知りながら、そっと囁く。

そして極卒から離れ、ベッドのもう一方の端に潜り直した。うつ伏せの黒髪を改めて眺め、考える。

いつもこうだ。深夜帰りとなると寝室に入り、人の顔を見るだけ見て気絶してしまう。

先の返事をもっと早く告げていたら、少しは違う結果になったのだろうか。

少女はできるだけ布団を手繰り寄せると、自分も早く眠ってしまいたい一心で、それを頭から被りこんだ。

柔らかい朝の光の中で、極卒の長い睫毛が震え、ゆっくりと上がっていく。

「おきた？」

少女が話しかけると、彼はまだ上がりきらない瞼のままに、こりと答えた。

「おはよう」

そして少しの間が空いたかと思えば小首を傾げ、

「ところで、どうしておまえがここにいるんだ」

と訊ねてくる。更に、両腕のみをベッドに預け絨毯に座りこんでいるという自身の妙な体勢にも気が付き、ますます不審そうな顔をした。

ああやっぱりと寂しく思う傍ら、少女はすかさず口を挟む。

「ごくそつ、つかれてたんじゃない？ 自分のへやとまちがえて、わたしのベッドでねちゃうなんて」

「おまえの……？」

眠気も覚めてきたのか、こちらを向いた極卒の目は既に通常通り見開かれつつあった。少女の言葉を瞬きで咀嚼し、そうかそういうことかと一人言を呟いている。

「どうにも、記憶があやふやだ」

「しかたないわ」

忘れてしまつのはきつと、自分のせいなのだろうから。という続きは心にしまっておく。

気怠げにたつぷり時間をかけて立ち上がると、極卒は背を向けて寢室の出口を目指した。

開きかけのドアに手をかけたところで今一度振り返り、どこか力ない笑顔を作る。

「すまなかつたね。さぞ驚いたろう」

「わたしは、大丈夫よ」

出ていく背中に返事を返し、彼の姿が見えなくなったのを確認して、再び布団にくるまった。

『好奇心は、猫を殺す、か』

六回目の夜、左目を覗いた極卒が、自嘲気味に放った言葉を思い出す。今となつては、この出来事を覚えているのもたった一人だけになつてしまった。

そして昨晚、彼の記憶は、八度目の死を迎えたことになる。

こんな訳のわからないことが、あと何度繰り返されるといつのだらう。

猫には命がいくつもあるというから、とりあえずはその数くらいかもしれない、とぼんやり思う少女であった。

いづきしん（後書き）

なのこと言えは左目が気になった話

どちらかというと、極卒は猫というより犬に近いイメージがありますが……

指切り

「きょうね」

夜が明けて間もない時刻のこと。咳くような少女の声に、極卒はデスクの小鏡から目を上げた。ちょうど口紅を引き終わったところで、いつもと同じく、口角からはみ出た赤色が、左右対称に上を向いている。

笑っていなくても笑って見える、あの騙し絵のような化粧だ。

「この程度、慣れれば誰にでもできる」

「そうかしら」

唇の形をなぞるだけであれば、確かに難しいことでもないのだろう。しかし、彼の場合は明らかにその域を逸している。少女にはそれが、鏡を見るだけで平然とできるほど、易しい技に思えなかった。

「興味があるなら、貸してやらないこともないぞ」

なおも口元を見つめる少女を見かねてか、極卒がにやりと顔を歪めて言った。だが貸すと言われても、若い少女には紅を引いた経験がない。

「きょうみはあるけれど、お化粧のしかたをしらないわ」

「なら、私が紅を引いてやるというのはどうだ」

今日はまだ時間もあるし、と付け足して笑う極卒に、どういう風の吹き回しだろうと訝りつつも灰の瞳を輝かせれば、彼は更に機嫌を良くしたらしい。くっくと喉の奥を鳴らし、口紅の容器と筆を手に立ち上がった。

木椅子の背を掴んで持ち上げたかと思うと、少女が座っているソファの前に下ろして腰をかける。

見上げれば、あの不気味なにやけ顔が、少女の目と鼻の先にまで迫っていた。

水を含んだ筆で紅を取り、極卒はそれを少女の血色の悪い唇へ運ぶ。

毛先が彼女の下唇に触れるか触れないかのところで、自分がこの紅筆を使用してから、まだ洗いもせず拭いもしていなかったことを思い出したが、気にせず止めかけた手を動かし、そつと色を落とす始めた。

人形のように大人しく、人形以上に白い肌に化粧を施すという作業は、極卒の中で、ある場面を思い起こさせる。

気が付けば、まるで、と声を出していた。

「まるで、死化粧師にでもなった気分だ」

「シゲシヨウシ?」

「喋るな」

それまでじっとしていた少女が唐突に口を動かすので、極卒は危うく、あらぬところへ紅を差してしまいそうになる。唇から筆を離すと思わず溜め息が出てしまい、こんなことに神経を磨り減らしている自分を、密かに嘲笑した。

傍らのデスクに筆を置き、右手の薬指で直接、白い陶器から口紅をこそげ取る。赤く染まった指を少女に近付けると、彼女は怪訝そうに瞬きをした。

「あれはつかわないの？」

「おまえがそうやってぺらぺらと口を開くからだ」

だからこれ以上話さぬようと、極卒は少女の口に薬指を押し当てる。小さいながらも弾力のある唇の感触が直に伝わってきて、何やら禁忌にでも足を踏み入れてしまったような気分になったが、そのまま指を滑らせ、ゆるやかな輪郭をなぞった。

少女が再び静かになったのを見て、極卒は先ほどの疑問詞に答えてやる。

「死化粧師とは、死人の化粧をする仕事だよ」

「どうして死んだ人に、お化粧をするの？」

やはり少女は質問を返してきたが、今度は極卒の予想通りだったため、薬指は彼女の上唇にぴったりと添えられたまま、軌道から外れることはない。

「さあ。死に顔と言えど、人前に出しても恥ずかしくない様であれ

という、遺族の勝手な希望からじゃないか？ ……ほら、出来たぞ」

容器の蓋を閉め、極卒はデスクに立ててあつた小鏡に手を伸ばし、それを少女に見てみると手渡した。自らは薬指にこびり付いた紅を落とすべく、席を外す。

指と筆とを拭いつつ横目で少女を見遣れば、彼女は大して喜びもせずに、神妙な面持ちで、ただじつと鏡の奥を見つめていた。化粧は成功し、口紅も割と似合っているのに、いったいどうしたことだろう。

いや、こんな小娘に化粧が似合うはずもない。そう思い直してかぶりを振り、また改めて少女に目を向ける。

そのとき、彼女の赤く縁取られた小さな口が、不意に開かれた。

「ねえ、ごくそつ」

これまで肌の色と同化していて、ほとんど認識したことのない少女の唇の動きだが、今は濃い紅のおかげではっきりと、極卒の呼び名を型どつたのがわかった。

「わたしが死んだら、ごくそつ、またお化粧してくれる？」

真面目な顔をして何を考え込んでいたのかと思えば、このように突飛なことだったとは。拍子抜けするついでに呆れ返ってしまう。少女より歳上であり軍人でもある極卒の方が、先立つ確率は紛れもなく高いというのに。

「馬鹿な。何故おまえが先に死ぬことになっている」

「だれがどうなるかなんてわからないわ。ただ、最後のお化粧も、

ごくそつにしてももらいたいなんておもったの。……かわりに、ごくそつが死んだときは、わたしがお化粧してあげる」

紅を引いてやった途端よく喋るようになったな、と物珍しさに目を見開く極卒の口角は、無意識に上がっていった。

「私の死後など知ったことではない。おまえの好きなようにするがいい」

戦場で死ぬとなれば、少女の元には自分の死に顔さえ戻って来ないのだから、という考えは口に出さないでおく。

「そう。じゃあそれまでに、わたしにお化粧のしかたをおしえてくれなきゃだめよ。約束ね」

『約束』という言葉と共に、少女は右の手袋を外し、立たせた小指を、こちらに向かって差し出した。初めは彼女の不可解な行動を怪しんだ極卒だが、そのジェスチャーについては聞き覚えがあるような気がして、少々頭を働かせる。答えは、案外早くに思い当たった。

「ああ、指切りという奴か」

「ゆびきり、しらない？」

「人から聞いたことはあるが、実際にやったことはない。確か、約束を破ったら罰を与えるというものだろう？ 本当に指を切るんだっただか」

だとしたら、それは日頃死と隣り合わせの身である極卒にとって、

大して脅しの意味を成さない罰であるように思えた。

「ううん。はりせんぼんをのませるの」

長い睫毛を備えた両目で、極卒は二、三度瞬く。針千本だかハリセンボンだか知らないが、指切りより余程現実味がない。

「それで、ごくそつは死化粧、してくれるの？ くないの？」

未だこれ見よがしに小指を突き出してこちらを見上げる少女の、澄んだ光を放つ右目と、不釣り合いに映える口元の紅色に、極卒は苦笑せざるを得なかった。

「……いいだろう。おまえの死後は委せておけ」

薬指にほんのり紅が残る手を伸ばし、立てた小指を、少女の細く短い小指に絡ませる。

「ゆーびきーりげんまん、嘘ついたーらはーりせんぼんのーます」

淡々と節を付け、繋いだ指を上下に振る少女を見ながら、極卒はこの薬指が彼女の唇に触れ、この小指が彼女の小指に触れるためにあるとするならば、残った三本の指も、それぞれ触れるべき場所があるのだろうか、などということばんやり考えていた。

そしてどういう訳か、この親指は恐らく、少女の喉に触れるためにあるのだろう、とも。

「指切った」

結びの言葉を、歯切れ良く言った瞬間の少女の顔は、極卒にひどく、強い印象を与えるものとなった。

艶かしく、そこだけ独立した生き物のようにならぬ、鮮やかな紅色の唇。

そこに、いつもの無垢な少女の面影は、少しも残っていなかったのだ。

指切り（後書き）

お互い人生で初の経験をする話

極卒は今まで指切りできるような暇も相手もなかった感じだな、
と
思いました

ドミノ崩し

暑苦しさ満点の衣装でもいくらかは過ぎしやすくなってきた初秋の昼。極卒は真後ろの窓を開けて涼風を取り入れたい思いを秘めつつも、あくまで平常通り淡々と内務に取り組んでいた。

目を通さねばならない書面の向こうからは、カーペットに跪いてもぞもぞと動く誰かさんの気配が感じられたが、今更行儀の悪さを注意するのもしないことだと紙をめくる。暇潰しの自由を残してやれる程度の良識は、彼の持ち合わせにもあるということらしい。

今朝、執務室のドアの裏から妙な音を引きずりながら姿を見せた少女の手には、小さな体に似合わぬいかにも高級そうな革張り鞆の持手が握られていた。何か特定の物を収納するためのものなのか、柔軟性を全く感じられない直方体の頂点はどこも凶器になりそうな硬派ぶりであり、少なくとも極卒に、私物の覚えはなかった。

「どうしたんだ、それ」

机の向こうへ問うてやれば相手は始業前の彼を前にまるで一仕事でも終えたような息を吐きながらドアを閉め、振り向きざまにこう答えたのだった。

「わたしのおへやのすみにおいてあったの。黒くて、小さいのがたくさん入ってたわ。一緒のかみにも絵とかがかいてあったけど、たぶん、おもちゃみたい」

そこまで言われてようやく思い出せたわけだが、それは確かに極

卒がどこかしらから持ち帰ってきた土産物の一つだった。少女を拾ってからの彼は、自身の留守を考えて外出先からできるだけ、暇を潰すのに役立ちそうな土産を選ぶようになっていたのである。

品選びには気を使っても、選んだ品への無関心は変わっていないものなのだなど、他人事のように思いながら苦笑を浮かべる極卒に構わず、彼女は慣れた動作でぱちんと鞆の留め金を外したのだった。

それから少女がどのようにあの寶子たからこと札とを掛け合わせたような玩具と向き合っていたのか、そんなことは用意されていた書類に手をつけ始めた極卒が関心を示すべくもないことだ。

ケースの中の取扱説明書くらいは彼も読んだことがある。というより、読まなければあれが玩具であることにすら気付かなかっただろう。しかし自ら選び取ってきておきながら、極卒はあの紙に書かれていた知性や相手を必要とするであろう正しい遊びのやり方を、幼い少女が理解できようとは微塵も考えていなかった。それ以前に彼女の場合、あの字を読めるかどうかすら怪しい。おおよそ、文に添えられた図説から玩具であるとの察しを付けたのだろうか。

一般的な遊び方が理解できなくとも、あの娘は娘なりに、新たな遊具を活用して新たな遊戯を考え出すに決まっているのだ。彼女には、そういう一人遊びの才能みたいなものが身に付いていることを、これまで生活をともししてきた極卒は何となく感じていた。

実際少女は自分の前で鞆を開けて以来、手に取った説明書を放り投げた今も文句一つ言わず、何かの作業に耽っている様子であった。

時折牌同士がぶつかり合うような音や、本来の遊び方からではあまり考えられないぱらぱらと連続した音が微かに聞こえる他は静かなもので、彼もいつものように仕事への意識を高めていく。

今後の計画を練るために地図でも引っぱり出すかと報告資料を脇

に置いたそのとき、極卒は目下の絨毯に広がる光景を初めて眺めることになり、思わず動きを止めてしまった。

それは、いつだったか異国の地で目にした夜景を連想させるものだった。長方形の牌がところ狭しと連立する様は平らな屋根の建物が並ぶ都会のようで、黒地の体にめいめい穿たれた白点は、そこに息づく人々の数だけ漏れる、室内灯の光を思わせたのである。

はてあの玩具はこんな風に立たせて遊ぶ代物だったであろうかと面白半分、よくこれだけの数を並べられたものだとその集中力に感心半分を持つたついでに、気付けば彼は未だ大工の頭領さんからの面持ちで部屋のすみに這いつくばっていた少女へ声をかけていた。

「大したものだね」

一人の世界という名の海底から、いきなり引つ張り上げられてしまった彼女は一つ大きく肩を震わせると、今しがた不安定な毛織物の上に置いた牌が無事であることを確かめてほっとしたように息を吐き、何の用だと言わんばかりにこちらを見上げてきた。

「気に入ってもらえたようで何よりだよ。まるで積み木のような発想だが」

「……そうね」

極卒の言葉に改めて周囲を見回しながら、少女は自分でも少し意外だといった様子で呟いてみせる。それから思い出したように「みて」と言っ指した先、絨毯の模様が円を描いて集中しているその中央には、ただ立てるだけでさえ不安定なはずの牌四つ分が横にした牌を挟んで二段重ねでそびえ立ち、その上さらに二つが横向きにつながって蓋か屋根かをしている何かがあった。その部分のみが、まさしく積み木遊びそのものだったのである。

「あれは、ここ」

ここ、というのは二人が今現在生活を共にしている、この邸を意味しているのだろう。なるほど幅をきかせた四角いシルエツトも、牌と牌の間に空いた長方形の空洞も、邸の外観と窓の形をそれとなく示唆しているようだ。

他にはこのように組み合わせられて建てられたものは見当たらず、邸形のオブジェを中心として、一つ一つの牌が整列でもさせられているかのように、足下の模様に沿って螺旋を描きながら少女の手元まで伸びていた。

「みていてよ」

「わかったよ」

自分から声をかけたとはいえ、珍しくこちらの注意を引こうとする発言をした彼女に多少の興味を抱いた極卒は、やるべきことも忘れて姿勢を直し、少女の視線をたどって、手袋を外していたその白く細い指先を見つめる。

血色が良くないながらもふつくらとしたそれは、心なしかためらいがちに、立てたばかりの黒い角に触れたかと思うと、そのまま軽く奥へと押し倒していく。

それからは全てがあつという間の出来事だった。

倒れた牌が前方の牌にもたれては倒し、倒されたものがまた前のものを巻き添えにしながら倒れる。それが無情ともいえる速さで巧妙に連鎖し、極卒の前で大きな渦を巻くように行進していくではないか。

同時に耳をくすぐって途切れぬ滑稽な音は少女がつい先ほどまで

たびたび立てていたものと共通し、これが彼女の本日の集大成であるらしいことを告げてきた。

ばらばらばらばら。

倒れていく、倒されていく。

ばたばたばたばた。

壊れていく、壊されていく。

それは彼の職業柄のせいか、一夜にして戦禍に沈んでいく都市の最期を彷彿とさせた。

あるいは点火してしまった導火線のごとき一途さで進んでいく、その終着点では、

「あ」「あ」

右半身を支える柱の一つをくじかれてしまった小さな豪邸が、これまた間の抜けた音とともに身をよじらせて、黒い瓦礫の山と化してしまったのであった。

そうして、二人の間に何とも微妙な沈黙が訪れる。当の少女が極卒と一緒にあって声を漏らした理由も気になるところだが、そもそも彼女は、この一連のどこに注目をさせたかったのだろうか。牌が綺麗に倒れていくところだろうか、それともそれが、この邸を模して作ったという牌の塊を崩してしまうところだろうか。このように毛羽立った絨毯の上では、どれほど慎重に、頑丈に組み立てたところで、ほんの少しの衝撃があれば均衡を失ってしまうことは明白だったであろうに。

「…………ふしぎ」

誰に語りかける気もないかのような微かな呟きも、このひとときの静寂の中では、むしろある種の魔力を伴って響いてくるようだ。

「あんなにがんばってならべたのに、どうして壊すのは、こんなにかんたんなのかしら」

少女の灰色の瞳は今や、ここにはない何かを眺めているふうにも見えた。

「どうして、壊すのはかんたんなのに、もとどおりにするのはむずかしいのかしら」

どんなものも、どんなことも。難しいどころではなくて、二度と元には戻せない場合だってある。暗にそう言っているのかとまで考えるのは、いささか買い被りが過ぎるだろうか。

仮に過言でないとすれば、彼女は、今まで数えきれない物事を破壊してきた極卒にこれを見せることで、警鐘の一つでも鳴らしたつもりだったのだろうか。どんなに見た目は立派でも、この邸とて壊れるときは簡単に壊れてしまう、だからいつまでもその椅子に座っていられると思うな、と。

まさか、と己の突飛な思考に一笑することで幕を引こうとしたとたん、机の向こうからひよっこりと顔を出した少女に、不本意ながら不意を突かれてしまった。

「これ、ごくそつみたい」

そう言って彼女が目の前に立てて見せたのは、つい先ほど、一つ残らず倒し散らかされた牌の一つだった。縦長の体を真つ二つに横切る線を境として、白点の数は上半分が五を、下半分が二を示して

いる。

「どつという意味だ」

自分という存在も、所詮はこれと同じ、その他大勢の命に紛れて倒れる結末を辿るだけだとも言うつもりか。

風通しの悪い軍服の下で、一粒の汗が背筋をなぞっていくのを感じた。

「だって、黒いおようぶくも、ボタンのかずも、ごくそつとおそろいでしょ」

ボタンというのは、この計七つある点のことなのだろう。言われてみれば確かに、極卒の格好と似ているといえなくもない。

「それだけか」

「それだけよ」

問われる意味がわからないとばかりに右目をぱちくりとさせる幼^{なご}児の表情には、それ以上の何かを見出だそうとすることさえ^{おま}ばからしく思わせる効能があようだ。極卒はやり場のない恥ずかしさに頬を緩めて息を吐き、結局、苦笑を浮かべてしまった。

「なら、それを持って早くあっちへお行き。仕事の邪魔だ」

「なによ、なんにもしないでみてたくせに」

「おまえが見ると言ったからだろう」

つれない対応が腑に落ちないのか、少女は訝しげにこちらの顔を覗きこんできたものの、それからすぐに掠め取った牌を握って部屋の中央に膝をついたかと思うと、散らばった黒いかけらたちをかき集める作業に戻ったのだった。それを見送りつつ、極卒も気を取り直そうと今度こそ取り出した地図を机に広げる。

黒光りする爪の先で、紙ごしに軽く机を叩いては真面目に取り組むふりをしながら、無意識の方がなお恐ろしい、と先ほどの出来事を思い出してまた一つ吐息をこぼしたのであった。

ドミノ崩し（後書き）

ちよつと臆病な極卒の話

ドミノを立てたり倒したりしてばかりいるのは日本くらいなんだそ
うですね。将棋倒しのせいとかでしょうか

あめのひ

その日も、少女は執務室の中で極卒の帰りを待っていた。

つい先程まで良かった天気は急激に崩れ、ひっきりなしにガラスを打つ雨音が、気だるさを助長するようだ。

仕事椅子に腰をかけながら、退屈しきった目を窓の外に向ける。最近はおっぱら大きなソファで人形遊びをするか、昼寝のどちらかで一日をやり過ごしていた少女だが、今日に限っては極卒のデスクで遊んでいた。

そして、そのまま居眠りをしてしまったらしい。

目が覚めて、机から頭を上げると、普段は彼女が占拠していた横長のソファに、極卒の姿があった。いつの間に帰って来たのだろう。

壁にかけられた時計によれば、まだ昼を過ぎてからそれほど経っていない。ずいぶん早いお帰りだった。

最も驚くべきは、彼がその上に寝そべっていたことだ。少女から見て奥の肘掛けに足が組んで置かれ、手前の肘掛けに、しつとりと黒光りする頭頂部が見えたのである。未だかつて、こんな体勢の極卒は見たことがなかった。

慌てて椅子から立ち上がり、ソファの前に回りこむ。近付いてすぐわかったことだが、彼の全身はすっかり濡れてしまっていた。朝は晴れていたため、雨具を持って行かなかったのだろう。

いや、天気がどうであれ、軍人である彼がそんな物を用意するとは思えない。少女は考えを改めながら、極卒の仰向けになっている顔を覗きこんだ。

その瞼はぴったりと閉じられており、湿り気を帯びた睫毛の長さ
が、はつきりと見てとれる。やはり、本当に眠っているようだ。

「くそつ、ねえおきて」

この状態では間違いなく風邪を引いてしまう、と心配して声をか
けてみたが、極卒が目を覚ます気配はない。更に続けて呼び掛けた
り、肩に手を置いて軽く揺すったりもしたのだが、どうにも効を奏
さなかった。

やがてこの方法を諦めた少女は、少しばかり逡巡したすえ、心を
決めてソファアのへりに手と膝を置く。

どう見ても高級な革製ソファアは、男一人が寝転がっていても、
少女が乗り上げるには十分な余裕があった。

膝をついたまま極卒の体を跨ぎ、足の長さの都合上膝立ちをして
いられず、結局腹の上に腰を落とす。衝撃で起きるのではと期待し
て勢いを付けたのだが、これも無駄に終わったようだった。

途方にくれた少女は、彼の上からもう一度顔を見る。濡れている
とはいえ、紅が崩れるほどひどい有り様でもなく、いつもきっちり
と分かれていた前髪が僅かにほつれている程度だった。しかし、こ
れだけでもかなりの違和感だ。

「くそつ」

無駄とわかっただけでいながら再び呼びかけた後で、少女はため息を吐
く。こうなったら、自分が上着だけでも脱がせるしかないだろう。

上から毛布をかけておけば、少なくとも今よりはましになるはずだ。
こうして迷う間にも、水気は極卒の服から自分の服へと伝染し、
非常に気持ちが悪い。少女は多少の罪悪感を覚えながら、黒い軍服

の第一ボタンに手をかけた。

その時、

「おまえが、こんな節操のない小娘だったとは思わなかったよ」

前方から不意に聞こえてきたその声に、少女は文字通り小さく飛び上がった。しまう。

驚きに見開いた右目で声の元を辿れば、そこにある極卒の顔では案の定、大きな両目がぱつちりと開けられていた。口も、耳まで裂けんばかりに吊り上がっている。

いつもの、不気味な極卒だ。

「いつから……？」

すっかり狼狽してしまい、声を震わせながら少女が問うと、彼はますます口の端をにいと上げた。

「さあね。おまえが私の上に跨がってからかもしれないし、声をかけてからかもしれない。或いは初めから、眠ってなどいなかった可能性もある」

落ち着かない鼓動を何とかしようと、目を閉じ、深呼吸をする。

気持ちの静まった少女が瞼を上げると、極卒の話が終わったのは、ちょうど同じくらいのタイミングだった。

「なんでもいいけれど、このままでは風邪をひくわ」

「今日はこの後も出さなければならぬ用がある。おまえに言われなくても、仮眠をとったら着替えるつもりだよ。いいから降りる

んだね」

「だめよ。今すぐじゃないと」

せつかく心配した相手に対してあんまりなその態度に、少女は半ば自棄を起こし、一度引いた手を極卒の首元へ伸ばす。

第一ボタンが外れた下に、またしても、しっかりとボタンの留められたワイシャツが露になった。雨水は中まで浸透していたようで、シャツが白い肌に張り付くさまは、見ている方をも不快にさせる。

これはいよいよ放っておけない。少女が先を続けようとすると、

「やめろ」

それまでろくな抵抗を見せなかった極卒が、低くも、よく聞こえる声で、初めて拒否の言葉を口にしたのだった。

「でも……」

「ねえ、ボクの言うことが聞けないの？ ボクはおまえよりずっと偉いんだよ」

とたんに高音化した口調を聞き、慌てて手を離す。同時に、自身の過ぎた真似を強く憤なんだ。

極卒の一人称が変わるときは、ろくなことがない。少女はこうして怒った彼の恐ろしさを、身を持って知っている。

「早く退け」

逆らえばどうなるかわからないと、少女は声も出せぬまま腹の上

を離れ、ソファから絨毯に、恐る恐る降り立った。

それを見届けてから極卒も体を起こして立ち上がり、目覚めて以来ずっと変わらない薄ら笑いで、こちらを見下す。

「そんなに言うなら先に着替えてきてやろう。おまえはこの部屋で反省していることだ」

そう言い置くと、彼はあつという間に部屋を出て行ってしまった。残された少女も、しばらくは閉められたドアを呆然と眺めていたのだが、やがてまだ極卒に謝っていなかったことを思い出し、慌ててノブを掴む。

申し訳ない気持ちが強すぎたせいか、相手が戻ってきてから謝るという考えは浮かばなかった。

極卒の寝室に続くドアが、中途半端に開いている。きつとまだ着替えの途中だろう。だが少女はそれさえ気にも留めずに、小走りで駆け寄っていく。

ドアの縁に手をかけ、中を覗く少女の目に映ったのは、

青白い背中に浮き上がる、無数の傷痕だった。

気が付けば、少女は執務室の中に戻っていた。

どういふ訳だか、咄嗟に逃げ帰ってきてしまったらしい。おそらく、極卒に気付かれてはいないだろう。

毎日元気そうに帰ってきていた極卒が、あんなに多くの怪我を負っていたとは。考えてみれば当たり前だったのかもしれないが、それにしたって、少女は今まで、彼が擦り傷一つ負った姿すら、見た

ことがなかったのである。

それにそう易々と、誰かに自分の体を傷つけさせるような男にも見えなかった。どの傷も、そう新しいものではなかったようだ。

いずれにせよ極卒は、あの傷痕を見られたくなくて怒り出したのかもしれない。

少女は改めて、自分の浅はかさを心から恥じたのだった。

雨はにわか雨だったらしく、知らないうちに窓から入りこんだ光が、部屋を中心に佇む少女の、湿ったスカートを照らしていた。

あめのひ（後書き）

極卒なら起きてるんだろっなという話

甘さって、難しいですね……

万華鏡

「では、行ってくる。おまえはここで」

「まっていればいいんでしょう、おとなしく。わかってるわ」

部屋を出る前から、すでに「つまらない」という言葉をべったり顔に貼り付けている少女を見て、極卒はつい苦笑してしまう。

「不満かい」

「だってごくそつ、昨日もお人形を壊したじゃない。なんともなおしてるのに。あんまりだわ」

「修理に出さないよりはましだろう。そもそも、私の目の届くところに置くのがいけない。あれを嫌っていることは、おまえもよく知っているはずなのだから」

軽く反論してやると、幼い相手は不機嫌に頬を膨らませこそしたが、もう言葉で対抗することはできなくなったようだった。

これはこれで大人げなかったかもしれないと思ひ直し、極卒は一度何も言わずに部屋を出て、自分の寝室からある物を手に少女の元へ戻る。そして、すっかりふてくされていた小さい手に、持ってきたそれを握らせた。

受け取った彼女は目を丸くさせ、その手にある筒状の品をまじまじと見つめる。

「これは？」

「万華鏡だ。どこの物かは忘れたが、土産にやろう」

そう教えても少女の表情は変わらず、陶器のすべすべした胴体を観察し続ける。

青地に植物の模様が繊細に描かれたそれは、万華鏡の中でも明らかに高価な作りであったが、二人にとって値段は大した価値にはならないものだ。

それどころか、少女は再び口を開くと、まるで未知の言葉と対面したときのように、復唱した。

「まんげきよう……」

こんな物も知らないのかと呆れ返り、極卒は時間が迫っていることにも苛立ちを覚えつつ、万華鏡を取り上げる。正しい向きを確認し、一方の端を少女の顔に向けて、その右目の高さに合うように持っていた。

「ほら、この穴から覗いてごらん」

ソファアの上で少しだけ前傾し、筒の端に目を当てた彼女は直後、あ、と小さく声を上げる。

「ちくおんきが、みえるわ。いっぱい……」

そう。この万華鏡は、あらかじめ中に仕込んだ小物ではなく、前方にある実際の景色を、三角形の反射鏡が美しく見せるという仕組みだった。そのため少女には今、ソファアの向かいに置いてある蓄音機が、様々な角度で、いくつにも見えるのだろう。

「これがあれば、少しは暇潰しの足しにもなるんじゃないか」

「ええ……きれい」

見慣れない世界に、少女がすっかり魅入られたのを確認すると、極卒は万華鏡を託してドアへ向かう。あれだけ気に入れば、もう文句は言われまい。

去り際、ドアを閉めるついでに振り返った極卒の目には、夢中で筒を覗く、踊るような後ろ姿が映ったのだった。

その夜、早足で部屋に帰るや否や、極卒はそこを飛び出していた。少女の姿が、どこにも見当たらなかったのだ。

寝室や客間にもいなかった。どうやら、屋敷を脱け出してしまったらしい。

最近は何より言うことを聞くようになったと思って、油断したのがいけなかったか。

自身の浅はかさと探し人を呪いつつ、極卒は玄関扉を強く開け放つ。門はかたく閉ざしてあるので、敷地の外にまで出てはいないはずだ。

建物に沿うよう歩きながら、物陰に目を配る。今までの経験からして、恐らく裏庭にでも回っているのだろう。極卒は少女がいなくなったことより、また言いつけを破られてしまったことの方が、腹立たしく思えてならなかった。

しなびた芝を踏みつけ、裏庭に出る。そこには思った通り、お目当ての人影が立っていた。

月の光を受け、ほのかに輝いて見える銀色の髪と、夜をそのまま閉じこめたような、不思議な色合いのワンピース。上向き加減な顔の前では、光を青く反射する、あの万華鏡が握られていた。

脱出の原因が、自分の渡した土産物にあつたとわかり、極卒は喉まで出かかっていたお咎めの言葉を呑みこんだ。

何を言うべきかわからぬままにゆっくりと歩み寄れば、足音が聞こえたのだろう、少女の方から、体の向きを変えずに話します。

「わたしね、夜がすきな。暗いほうが、おちつくから……でも、ときどき、怖くなる」

それはまさに上の空といった風で、誰にともなく、細切れにした言葉をただ、ばらまいているだけのような口調であった。

「今日も、怖くなったわ。ひとりぼっちで。だからこれで、空をのぞいてみたの。そうしたら、夜はまっ黒じゃないって、よくわかった。空も、星も」

見つけた当初から、微動だにしていないう万華鏡の向く先を目で追えば、空の高くに三日月が見えた。空気が澄んでいるためか、その光は眩しさを感じるほどに強い。

極卒は、ようやく口を開く。

「そして、月も万華鏡で見たいと思ったのか」

執務室の窓は、太陽や月を見るのに、あまり適した方角に位置していなかったためだろう。

「ええ。もようみたいに、いっぱい光って、とつてもきれいよ」

ある意味で言いつけを守り、今日という日を万華鏡一本で過ごした少女。自分が帰ってきた今さえ目を離さないのは、月の引力ゆえなのか。

「まるで……空にうかんだ、舟、みたい」

「舟だったら、おまえは乗って行くのか」

ぼつりとこぼされた言葉に、極卒もまた、銀の小舟を見上げて訊ねた。

二人の間を、月明かりで冷えた風と、しばしの沈黙がすり抜けていく。この間、少女は何を考え、また何を思い出していたのか。想像すること自体は難くないのだろうが、極卒は月光に目を細めることでそれを放棄し、ただ、相手の答えを待った。

やがて、どこか不安定さを伴った、小さな声が返ってくる。

「どうかしら。舟はわたしの、たいせつなものを、つれていってしまふもの。……そんな、きがするもの」

そう言うと、これまで一点だけを見つめていた少女は唐突に片足を引き、軽やかに回転してこちらを向く。

万華鏡の青い残像が消え、今の今まで月の光を集めていたレンズが、今度は真正面から極卒を捉えた。彼はそれを、いつもの笑顔で迎える。

「ごくそつの、かおがみえるわ。いっぱい」

「そつだろつね」

「やっぱり、不気味ね」

「それはどうも」

「どういたしまして」

妙なやりとりがすんなり決まったところで、彼女はようやく腕を下ろす。

何やら久しぶりに見たような気さえする、夜の光に濡れた灰色の瞳は、万華鏡よりも余程綺麗に、極卒の姿を写し出しているように思えた。

「おかえりなさい」

万華鏡（後書き）

ロマンチックを目指した話

某夢の国にあった万華鏡屋さんに、もう一度行ってみたいものです

あいつば

照明の光が行き届く広い部屋の中、ソファの上でうずくまっていた少女は、自分を取り囲む無機物たちにも引けをとらないほどに、動く気配を見せなかった。

やがて硬い床を打つ靴音が聞こえるにつれ、ゆっくり、抱えていた膝から顔を上げる。そして音の響きや間隔から、その主が自分の待ち構えていた人物らしいと確信するなり絨毯に飛び降り、目の前に転がっていた紙の筒に手を伸ばした。

片方だけが蓋をするように塞がっている側面からは一本の細い糸が伸び、部屋の出入口になるドアの鍵穴へと続いている。

鍵穴の向こう側では、今少女が手にしているのと同じ形の筒が、糸の先に繋がれて廊下の上に転がっているはずだ。

着々と大きくなっていた足音は、ちょうど部屋の前に来たあたりでぴたりと止んだ。

後は彼が、あれを無視せずに拾ってくれるかどうかである。

と、思った矢先に手の中で軽く引つ張られる感触があったため、少女は慌てて筒の開いている方を自分の口にあて、声を出した。

「あんまりひっぱらないで。どうぞ」

そして今度はすぐに筒を耳へ押しあて、じっと向こうの出方を窺う。

ちゃんと声が届いたのだろう、返事はまもなくして、どこかくぐもった感じを伴いながら返ってきた。

『これはおまえが作ったのか』

思っていたよりもはっきりとした声が、紙をびりびりと振動させて耳を覆うのがわかる。少女はそれに少しばかり驚き、かつ面白く感じながら、再び筒の中に話しかけた。

「ええ。この人におしえてもらったの。こんなにこえがちかいなんて、ふしぎだわ。どうぞ」

『まあ、それが糸電話というものだ』

「つくってみたはいいけれど、一人じゃあそべないっていわれて…ごくそつがかえってくるのを、ずっとまっていたのよ。どうぞ」

『そんなところだろうと思ったよ』

未体験の感覚をもつと味わいたいというのに、極卒ときたらどうして短い言葉しか寄越さないのか。これは聞き慣れている人の声をいつもとは違う距離、響きで聞くことを楽しむ遊びのはず。自分ばかりたくさん喋ったところで、損をする気分になるだけではないか。

少女は相手が見えていないのをいいことに、鋭い目付きでドアの向こうをねめつけた。するとそれを知ってか知らずか、耳に付けていたままの受話器がまたいきなり極卒の声を吐き出したので、つい肩を震わせてしまう。

『そろそろ、入ってもいいか』

長々と帰りを待っていて、こんなに早く終わらせられては堪っ

たものではない。少女は咄嗟に彼を引き留めた。

「まって、はいっちゃだめ。はいるには、えと……そう、あいことばをいわないと。……どうぞ」

最後の『どうぞ』は危うく言い忘れそうになったところを焦って付け足したために、直前の言葉と少しだけ間が空いてしまった。

適当に言ったことなので、もちろん正しい合言葉など決めているはずもない。これから会話を続ける間に何か考えておかなければ、と少女は密かに頭を捻る。

その向かいで明らかに呆れた息を吐く声も、糸電話を通じればまるで耳元に直接吹きかけられているかのようだ。

『私は仕事から帰ってきたところなんだぞ。ゆっくり休ませてやるうという気はないのか』

咎めるような言い回しではあるが、トーンから察するに言うほど気分を害している様子もないらしい。むしろあちらはあちらで多少なりとも面白く思ってくれているのか、愉快そうにやつく様が目に浮かぶ雰囲気でさえあった。

「いいじゃない、たまには。だれかさんのおかげでわたしは、まいにちがたいくつなんだもの。どうぞ」

『ところで、そのどうぞと言うのは何のつもりだい。かなり不自然だぞ』

「これをおしえてくれた人が、いつてたの。ごくそつたちはムセンでお話しをするとき、こんなふうにいって。どうぞ」

『それはそうだが、これは無線でもなんでもないだろう』

「にたようなものだわ。だからごくそつも、お仕事でしてるみたいに話してみて。あなたが外でどんなことをしてるのか、わたし、もつとしりたいんだもの。どうぞ」

それから彼が参ったと言わんばかりの声を返してくるまでには、結構な時間がかかった。

普段やっていることだというなら、何をそんなに躊躇う必要があるのか。まさか今さら照れたわけでもあるまいし、と少女は小首を傾げて耳を傾ける。

『……了解であります。どうぞ』

自分に対して敬語が使われたことがあまりにも新鮮で、わあ、と自然に声が漏れてしまった。

このときばかりは、ドア越ではなく面と向かって、へりくだる極卒の顔を見てみたいと思えたほどである。

「いつも、そんな話しかたったの？ どうぞ」

『いや、前の自分を思い出して、真似しただけだよ。無線にせよ何にせよ、今ではおまえと話しているのと同じような口調しか使わないからね。つまらないだろう。どうぞ』

「そうね。しばらく、さつきみたいに話してもらおうかしら。どうぞ」

『我儘な上司でありますね。どうぞ』

それから二人は、いわゆるごっこ遊びの感覚で、いくらか対話を繰り返した。

彼を使って手作りの糸電話を試してみようと思った当初は、誰がここまで乗り気になってくれると予測できただろう。少女にはそれが嬉しくてたまらず、できるだけ会話を続けさせようと、常々気になっていた疑問などをあれこれ投げかけていったのだった。

その一部を取り上げるなら、例えば「好きなことは」と訊ねれば『演説であります』と答え、「かぞくはいるの」と訊けば『もういないと思われます』などと返ってくる。

相変わらず短い言葉の応酬だったが、この試みはおよそ成功したと言って良さそうだった。

しかしあまり敬語ばかり話されると、注文しておいてそれこそ我儘な話ではあるのだが、段々極卒という人間が、少女にとって遠い存在であると囁かれているような気がしてくる。

『お訊きになりたいことは以上でしょうか。どうぞ』

相手の声にふと我を取り戻すも、その瞬間に考えておいたはずの質問が全てどこかへ行ってしまう、繋ぎの言葉をもごもご口にするこじかできない。

「え、ええと、つぎは……その」

『質問がないのであれば、そろそろ入室の許可を。どうぞ』

「あ、だから、あいことばがないと……」

『合言葉と仰られましても、自分には全く見当が付きかねます。何

か手がかりがございましたら別でありましょうが。どうぞぞ」

なぜだろう、どうして自分ばかりが今、このように複雑な気持ちを抱えなければならぬのか。少女はぼんやりと、けれど真剣に考えた。

それは言わば他人行儀ゆえの淋しさであったり、知り尽くしていると思いきんでいた相手の、知らなかった一面が自分の認識の外にあったことに対する、やり場のない嫉妬心であったりするのだろう。だがまだ年端も行かぬ少女に、そんなことがわかるわけもない。

わかるのはただ、彼に敬語を使われたのが始まりらしいということだけで、とにかく今は、それをやめさせることが最善の策であるように思えた。

「……そうね。じゃあヒントをあげる。かわりに、もうその話しかたをなおしてちょうだい。どうぞぞ」

『なんだそれは。本当に我儘な小娘だね。どうぞぞ』

直ったら直ったで口は悪かったが、語尾に『どうぞぞ』を付けているあたり、幸いまだ気を悪くしてはいないようだった。

その声を聞いてどこかほっとしてしまったことに気付き、少女はやはり普段通りが一番しっくりくるものだ、と改めて実感する。

「わがままで悪かったわね。ヒント、おしえてあげないわよ。どうぞぞ」

『おや、忘れたのかい？ 部屋の鍵は私が持っているんだよ。どうぞぞ』

「それでも、ここまでつきあってくれたわ。そうでしょう？ どうぞ」

『くひよ、分かってるじゃないか。なら尚の事教えておくれ。どうぞ』

ようやく、調子が戻ってきたようだ。少女はそのことにひとまず元気を得る一方で、さて合言葉については結局何一つ思い付いていなかった。

そうして何を言ったものかと、紙の筒を口に当てたままの姿勢で黙せば、

『まさか、今更合言葉を考えているんじゃないだろうね』

からかうような声が、手元の電話を振るわせる。

同時に目の前、飴色に塗られたドアの外側からも、同じ言葉を微かに聞き取ることができた。

思えばそれは今日最初に聞いた極卒の生の声であり、少女はそのときになって、自分と彼との距離がほんの二メートルもなかったことを再認識したのである。

こんなに近くににいるのに、今まで自分は何をやっていたのだろう。彼女はそう苦笑して静かに、口を開いた。

「ね、ごくそつ。もし、ごくそつがこのおへやにはいったら、わたしはさいしょになんていうとおもっ？ ……それをあてられたら、中にいれてあげるわ」

『なんだ、そんなことか。随分と簡単だね』

「そっ?」

『そうとも。だって……』

がちやり、と重厚な音を立て、くすんだ金属の錠が回転する。

『今、試してみれば判ることだ』

言葉が終わるや否や、それまで二人を隔てていたはずのドアが、勢いよく開け放たれた。

鍵穴を通して二人を繋いでいた糸電話もそれにつられ、あっという間に少女の手から離れていく。

突然のことに言葉を失った部屋の中で、開いたドアが壁を打つ音と、続いてそれに持つていかれた紙筒の、からからと揺れる音だけがよく響いた。

そして邪魔をするものがなくなった彼女の前では、もはや当たり前すぎて何とも思えなくなってしまった、あの青白い顔が、実に嬉々とした様子でこちらを見下ろしていたのである。

「ただいま」

彼は少女と目が合ったとたん、その赤く縁取った口と大きな両目を滑らかに細め、促すように、首を傾げた。

「ほら、どっぞ?」

さあ

なんていおう？

満面の笑顔を前に、うつかり頬を緩ませつつ。

少女は小さく開いた口から、すう、と空気を取りこんだ。

あいことば（後書き）

大分なついたなのこの話

最初は愛言葉と掛けた駄洒落でいこうと思ったのですが、そもそも愛なセリフとか書けない人間なので断念しました

雪の日

かつこつ、と静まり返る廊下にブーツの踵を打ち鳴らし、急ぎ足で執務室を目指す。

予定よりもだいぶ遅い帰りになってしまった。冬も半ばとなったこの頃は、夕刻にもなれば当たり前のように空が黒の天蓋で覆われ、気温も人を凍死させるに十分なまで低下してしまう。帰りの車窓から雪が降り出したことを知った極卒は、あの無駄に広い部屋で待たせた少女が独り凍えていやしないかと、少々気がかりになっていた。

ようやく辿り着いて手を伸ばしたドアノブは、氷のような冷たさをもって彼を迎えたが、ためらうことなくそれを捻り、押し開ける。

「待たせて悪かつ、た」

全てを言い終わる前に、極卒は部屋で起こっている異変に気が付き、口を閉ざした。部屋の電気がついていなかったのだ。

それまで気にも留めていなかったが、そう言えば廊下の明かりも消えていた。いや、誰もつけようとしなかっただけかもしれない。

ここに来るまでで暗闇に慣れていた目を動かし、部屋の中を見回してみると、どうやら他にも不可解な事態で溢れ返っている。目立つところにあつた蓄音機は台ごとひっくり返され、ソファーには強く引つ搔いたような無数の深い傷痕。硝子棚の骨董品はいくつかが床の上で悲惨に砕けた姿を晒し、本棚の中身やデスクの資料も、絨毯の上に盛大にぶち撒けられていた。

そして、この雑然とした光景の中から、自分のものとは違つ、か細くも荒々しい息づかいが、断続的に響いていることにも気付く。

呼吸の出所を辿って部屋の中央、散乱した紙束の上に、こちらへ頭を向けて仰向けになっている、少女の姿があった。

小さな胸部が、痛々しい程大きく上下している。

「な……」

何があった、と叫ぼうとしたその時、目前の少女の頭が僅かに動き、逆さまになった右目と、目が合った。極卒の姿を灰色の瞳に映した彼女は、間隔の短い呼吸を繰り返す口を、ほんの少しだけ広げ、

「くく、そつ」

確認するかのように呟いて、そのただでさえ大きな目を、更に見開く。そして唐突に体を起こしたと思いきや、絨毯を資料の上から力強く蹴って、極卒の懐へと、勢いよく飛び込んできた。

背中に手を回される感覚があり、次いで服越しにじわじわと冷気が伝わってくる。心配していた通り、やはり少女の体はすっかり冷えきっていたのだ。しかしそれとは反対に、前方から忙しく吹きかけられる吐息のせいで、極卒の腹から胸にかけては異様な熱を帯びつつある。

見たところ、少女が怪我を負っている様子はなく、いつもの青いワンピースも多少の汚れは有るものの、傷ついたり破けたりはしていないようだ。初めこの惨状を他意によるものかと疑った極卒だったが、それさえわかれば、部屋を荒らした者が彼女だと理解するには十分だった。

「何故、部屋を散らかした」

少女の頭頂を見下ろし、冷静に声をかけたが、彼女は極卒の服に埋めた顔を上げようとはしない。

「……ごめんなさい」

小さな両手が、強く、背中 of 生地を握り締めたのがわかった。

「何故かと訊いている」

理由を言わぬ少女に対し、ただ語気を強めて問い直す。すると、彼女はしばらくの沈黙の後、短いながらも、先程とは違う言葉を発した。

「ごくそつ、わたし怖いの」

ようやく顔を上げた少女と、再び目が合う。その丸い灰眼は今や溢れんばかりに濡れていたが、一度捉えた極卒の視線を、決して離そうとはしなかった。

「お外をみていたら、おもいだしそうになったの」

まぶかさんのこと

白く細い喉から、絞り出すようにして出てきたその単語に、極卒はほんの僅か、眉間に皺を寄せた。それを知ってか知らずか、少女はもう一度口を開く。

「……おもいだして、しまいそうになったの」

彼女の背後にある窓へ、目を向ける。そこは厚手のカーテンでし

つかりと閉じられているため、外の景色を見ることはできない。だが、あの向こうでは今も変わらず、雪が降り続けているはずだ。

極卒は、以前、雪はおもいでなの、と少女が言っていたことを思い出した。

「思い出したかったのだろう、おまえは」

「さいしょは、そうだったわ。でも、今は、だって……」

一瞬、伏せられた少女の目に、大きな揺らぎを見つける。湿り気を帯びた長い睫毛だけが、幼い彼女の中で妙な色を放っていた、と、少なくとも極卒は感じた。

「おもいだしてしまつたら、もうごくそつと、一緒にいられなくなつてしまふんじゃないか、って」

またしても自分に向けられた少女の片目に、思わず、息を吞んでしまう。彼女の視線はあまりにもまっすぐで、目を背けてしまいたくなるほどだった。

「……怖く、なつて。だから、おもいださないように」

そこまで言つて、少女は口を嚙む。これ以上は言うまでもないと判断したのか、あるいは極卒に叱られる事を恐れて、言葉が出なくなったのか。再び服の中に顔を沈めてしまった彼女の肩は小刻みに震え始め、時折、しゃくり上げるような声が、二人ぼっちの部屋にこだました。

雪玉のように丸く、小さな頭に片手を乗せ、色素の薄い髪を一掻

きすいてやる。

「泣くのはお辞め」

今までの非情さとは打って変わって、穏やかな声色が口から出たことに一番驚いたのは、誰であろう極卒その人だったに違いない。

「私はここにいます。どこにも行ったりはしないよ」

優しく諭すように言い聞かせながら、少女の肩を掴み、速まり始めた鼓動を悟られる前に、距離をとる。

予想外の言葉に驚いたのはやはり彼女も同じだったらしく、泣きべそ顔のまま、呆然とこちらを見上げていた。二、三度瞬きをしてみせてから、その言葉の意味を理解したのだろう、徐々にいじらしい表情を浮かべ、

「明日は、カイギがあるのよね」

と、言っただけだ。

これが少女の張った精一杯の意地なのだということくらい、簡単に察しの付いた極卒だが、ここでは、敢えて物分かりの悪いふりをしてみたくなった。

「ああ、それも朝から遠方だね。夜明け頃には、また出なければならぬだろう。おまえはここで良い子にしていなさい」

すると思った通り、少女は気分を害したようで、

「嘘つき」

膨らせた彼女の頬に、けれど、もう先程までの悲しみは見受けられない。

どういう訳かひどく満足した極率は、それから二人してくすくすと笑い合い、まだ雪が降っているであろう、カーテンの向こうを見つめて、ある感慨に浸る。

少女と出逢ってから、もう一年が経とうとしていた。

雪の日（後書き）

目深帽子　　<　極卒になってきたなのこの話

一年にはまだ早い気もするので、これより前に別の話を割り込ませ
ると思われませ

星飲み

閉めきつたカーテンを僅かにずらし、極卒は車窓の向こうを確認するように覗き込む。

雪は降っていないが、一定の速度で後方へ流れていく枯木の列は、いずれもその枝先に凍ったきらめきを纏い、根本から遙か遠くの地まで一面が白に覆われていた。

動物の足跡さえ見当たらない、夜の銀世界。しんと冷えた静寂を乱しているのは、極卒たちを乗せて走る、二本の轍だけだ。

天気と目的を除けば、一年前に見た光景と何も変わっていないのだな、という感想を抱いていると、

「わたしも、外がみたいわ」

横から聞き馴染みのある、小さい鈴のような声が響いてきたのだ。つた。

「駄目だよ。また暴れられたら迷惑だ」

再びカーテンを閉めながら、向き直った先の少女に笑顔を返す。彼女はただ、不機嫌そうに右目を細めてみせた。

言い出したのは、どちらであっただろうか。

極卒は初め、少女の記憶など戻らない方が良く考えていた。

本人はそれを望んでいたようだが、個人的な過去はあるだけ面倒だろうし、何より、彼女の記憶の片隅にしがみ付いていた『まぶかさん』なる男のことが、どうにも気に入らなかったのである。

しかし先日、少女は記憶が戻ることを恐れて、極卒の仕事部屋を荒らしに荒らすという事件を起こしてしまった。この大暴れの引き金となったのが、窓の外に降っていた雪だった。

あの日、変わり果てた部屋の中央でとても苦しそうに横たわっていた少女の姿は、以来極卒の脳裏に焼き付き、なかなか離れようとならない。

だから、なのだろうか。気付けば彼らは互いの意思を確認した上で、二人が出会ったあの湖を、目指すことにしたのだ。

「ねえ、そのビン。なにが入ってるの？」

そう言って少女が指したのは、極卒の左手に握られていた、丸く平べったい形の瓶だった。

ダイヤモンドを思わせる切細工が施されたそれは無色透明なガラス製で、すぼんだ口を塞ぐ栓もガラスになっている。中にはこれまた透明な液体が半分ほど、車体の小刻みな揺れに合わせて、たぶたぶと波打っていた。

「これか？ 酒だ」

瓶の首を掴み、少女によく見えるよう、軽く掲げてみせる。すると、相手はどこか軽蔑を含んだ目付きで見返してきた。

「のんきなものね」

「暢気なものか。これは私ではなく、おまえのための物だぞ」

次の瞬間、少女の目は驚いたように見開かれ、灰色の瞳がぱちぱちと瞬く。

片目だけでもよく分かる感情の変化に、極卒は面白さでますます顔が綻ぶのがわかった。

「湖を見れば、おまえは何かを思い出すかもしれない。だが、思い出さない方が良い記憶というのもあるだろう。現実から目を逸らしたいときや、忘れたいことがあるときには、昔から酒が一番と言われている」

説明が終わっても、少女はきよとんとしたきり、言葉を発しない。

「どうかしたか」

「……あきれた」

もっともな意見に、極卒は愉快さのあまり、くつくつと喉を鳴らすのだった。

車を降りた二人の前には、輝きに満ちた世界が広がっていた。

足元から彼方に見える山の峰をも覆い尽くす、雪。あまり広くはない湖に漂う、薄氷の欠片。そのぐるりを取り囲んだ植物を飾りたてる、霜や氷柱。それら全てが、紫紺の空から降り注ぐ星明りを身に受けている。

上着を氷点下の風が貫けば、それに応えるように、無数のきらめ

きは星と違わぬ瞬きを見せた。

「月は、出ていないのか」

空を仰いで呟く内に、少女はもう、極卒の傍らから姿を消していた。それに気付き、雪の踏む音を辿って前を向くと、湖とその縁に立つ一本の枯木との間で足を止めた、ちっばけな後ろ姿が目に入る。一つ息を吐いてから、自分もガラス瓶を携え歩み寄った。

湖の上にまで枝を伸ばした木の下で、少女は周りを見回そうと一回転する。

その眼差しは真剣そのものであり、回り方もどこかぎこちない。微かに翻った、コートの下から覗く青色のワンピースの裾は、そう言えば、あの星空と良く似た色合いであるような気がした。

湖の方に向き直り、動きを止めた少女はやがて、その右目を少しずつ丸くさせながら、取りこぼすように声を発する。

「サン、シ……スイ、メイ」

それはまだ幼い彼女が、到底口にするとは思えない言葉であった。異変を横目に見ていた極卒は一瞬だけ眉間に皺を寄せるも、横に倣って湖へと視線を移し、平然とした素振りで応える。

「ああ。ここは美しい。まさに山紫水明だ」

そう言い終わるや否や、隣の少女が全身をわなわなと震わせていることに気が付いた。

大きく見開ききった灰の虹彩が、何かを恐れるように、あるいは何かを探すように、あちこち小刻みに泳いでいる。

間違いない。何かを思い出しているのだ。

ただ様子を見てみると、ふいに、頭の向きはそのまま、少女が手袋付きの小さな左手だけをこちらへ差し出した。

「ごくそつ……おさけ、ちょうだい」

絞り出したような声も、ひどく震えている。

極卒は何を言うこともなく瓶の栓を抜き、手渡した。彼女はそれを両手でしっかりと持ち直すと、飲み口に震える唇をあて、一気に上を向く。

星の輝きを受けた液体が、小さな口の中にするすると吸い込まれていく。二回ほど喉を鳴らしたあたりで、詰まった息を吐き出すと同時に顔から離れた瓶が、極卒の手に返ってきた。

大分残った酒を受け取り、彼はまた何ともなく湖の方向を見遣る。白い世界の真ん中で、静かに暗い色を湛える水鏡はまるで、大地にぼつかりと口を開けた、もう一つの夜のようにだ。

「何か、思い出したか」

答えが返ってくることはない。妙に感じて横を見れば、早くも酔いが回ったのだろう。そこにはゆったりと、しかし大きく体を揺らしている、少女の姿があった。

倒れぬよう背中に手を添えてやると、彼女は伸びてきた腕にしがみ付き、極卒の右肩に安定しない頭を預けた。

長い睫毛を重たげに震わせ、苦しそうに、熱のこもった息を吹きかけてくる。

瓶を地面に置き、空いた手で銀色に艶めく髪を触ろうとしたとたん、たどたどしい語り口が、右腕を伝って耳に入ってきた。

「ねこ……が、いたの……」

吐息混じりの掠れ声は、隣に立っているといえども、やっとのことで聞き取れる程度だ。

「……ここに。ずっと……みてた、の」

そこまで言うと、少女はついに濡れた目を閉じ、やがて規則的な深い呼吸を繰り返すようになった。

すっかり暖まった細い体を抱え上げ、止めさせていた車の座席に、優しく横たえてやる。

それからもう一度湖の前まで戻ってくると、極卒は雪原の中で輝く瓶を拾い上げ、ガラスと無色の液体越しに、湖に映る星屑を覗き見た。

口を付け、一息に空を仰ぐ。

下唇に留まる雫を、指先で舐めるように拭い取り、まだ酒の残った容器を湖の上から真つ逆さまに傾ける。

少量のアルコールが溶けた水面は、そこだけが透き通った模様を描き、歪んだ光の粒を、極卒の黒く、くすんだ瞳に反射したのだった。

星飲み (後書き)

どさくさにまぎれて間接な極卒の話

未成年の飲酒はダメですよ！

おもいで

部屋の鍵が落とされる音を確かめた少女は、しばらく待ってからそつと内鍵のつまみをひねり、ドアを開け、廊下に頭を出して辺りを見回す。

これでは閉じこめたうちにも入らないだろうに、とは常日頃から疑問に思うところであるが、恐らくは申し訳程度、表面上でもそうすることに意味があるのかもしれない、と考えることにしていた。

誰もいないことを確認し、すばやく外へ飛び出して寝室に入った。ベッドの下に隠していた人形を引っ張り出すと、そのまますぐ元の部屋へ戻って鍵をかけ直す。それから大きなソファ―に体を沈め、持ってきた物を観察し始めた。

長らく愛用してきた、二体一組の人形。左手に持った女の子の人形は大部分が薄汚れているのに対し、右手の中の帽子を被った人形は、極卒に破られたり壊されたりで何度も修理に出された経緯から、むしろ新品に見える。

かつてはこれらさえあれば、どんなに長い時間でも飽きずに遊び尽くす自信があり、実際、できていた。ひどく霞んだ思い出をぼんやりと、人形を通してなぞることが楽しくて仕方なかったのだ。

けれど今はもう、そのシルエットを見つめているだけで胸が詰まるような気分になる。心のどこかが、思い出してはいけないと拒絶している。

それでもやはり、少女はこの人形たちから距離を置くことも、目を逸らすこともできなかった。

どうしたの

頭の底から、氾濫しようとする記憶。

大丈夫だよ。私がいるから

それは既に、自分と目深帽子とが、初めて言葉を交わした頃にまで遡っていた。

きみはもう、一人じゃないんだ

やめてほしいと振り払おうにも、暖かな声が心を強く揺さぶり、それを阻害する。

なぜ、失ったままでいられないのだろう、と少女は幾度となく苦しんだ。しかし少しでも取り戻してしまったものは、もうどうやっても追い求めるしなくなってしまうのである。

だから、こんなに嫌と感じる気持ちがあったところで、記憶の逆流は増すばかりであろうし、また、極卒にあの湖へと誘われればきっと、二つ返事でついに行ってしまうに違いない。

今日からは、私と一緒に遊んであげよう

甘い言葉の数々に堪えきれず、少女はついに目を閉じた。

そもそも拒絶するだけの根拠さえ、本当はわかっていないのだ。ただの記憶に害があるとも考えにくく、思い出してみれば案外、楽になれる可能性だってある。

必死でそう言い聞かせ、暗くなった彼女の視界にはだんだんと、大きな男の影が映し出されていった。

目深帽子は初め、帽子を被っていないかった。

ひとりぼっちに怯え、膝を抱えるばかりだった毎日に手を伸ばした彼の、微笑む左目の色はあまりにも自分のそれとよく似ていて。少女が心を開くのに、時間などかかりはしなかった。

その男と過ごす日々は桁違いに楽しく、少女は彼を兄のように慕っていた。彼が帽子を被るようになったのも、元はと言えば少女の提案からだ。

ねえ、みて。これ

二人で街を歩いた日、少女はとある帽子屋の前で足を止め、そのショーウィンドウに張りついた。見本として飾られていた品物の中に、あの黒いシルクハットを見つけたのだ。

この帽子、のっぽだから、きつとにあうわ

運命の出会いを果たした気分で男を見上げれば、彼はそれに優しく賛同し、すぐ店に入って同じ物を買ってきてくれた。

ところがいざあてがってみると、サイズを見誤ったのか、男はその目が隠れそうなほどに深く被らなければならなかった。そんな間の抜けた姿を面白がり、以来少女は彼のことを『まぶかさん』もとい目深帽子と呼ぶようになったのである。

目深帽子は、少女にたくさんの宝物を与えてくれた。彼の帽子のように大きすぎる手袋、不思議なグラデーシヨンのワンピース、二人にそっくりな番いの人形。そして何より、楽しい思い出の数々。あの日が訪れるまで、彼と過ごす時間は文句の言いようがないくらいに、満ち足りていた。

「……』あの日』?」

はた、と少女は記憶の海から顔を上げる。

「あの日……って、なあに?」

思い出せない、まだそこまでは。

だがその日を境に、少女が目深帽子と長い旅を始めたのは、確かであるようだった。

本当に、とても長い旅であったような気がする。

色々な所を見て回った。夜景の美しい街や自然に囲まれた村、大きな教会の中でこっそり寝泊まりをした覚えもある。決して楽な暮らしとは言えなかったが、二人でいれば、どんなに辛い状況でも幸せを感じていられた。

だが、旅にはいつか、必ず終わりの時がくる。

徐々に生きる術を失っていった少女達は、終点に相応しい場所を求め、雪の降りしきる地をさまよい歩いた。その果てに見つけたのが、あの湖だ。

当時、つまり去年も、そこにはひどく美しい光景が広がっていた。少女はこの場所こそが自分たちのたどり着くべき場所だったのだと直感し、喉にぎゅっとこみ上げるものを感じる。

近付いてみようと思案する目深帽子に、そうね、と短く返事を言えば、こらえていた涙がぼろり、ぼろりと溢れ出し、泣き虫やさんなんだから、と優しく頭をなでられた。

山紫水明だ

それは湖の畔に立った目深帽子が、柔らかな吐息と共に呟いた言葉であった。

どこまでも澄んだ星空と、全てを静寂に閉じこめるような雪の中。煌めく世界の中心にはただ、少女と目深帽子の二人だけが存在していた。

ねえ　ここがいいね

どちらが言い出した言葉だったか。記憶の中の響きとしては、悲しみを克服しようとする少女の決意の声にも思え、また、なかなか泣き止まない彼女にそっと投げかけられた、目深帽子の優しさの声にも思えた。

あるいは二人一緒に、全く同じことを言ったのかもしれない。

最後にもう一度だけ頷き合い、彼らは薄氷の合間から、夜よりも暗い水底に沈んでいった。身を投げる瞬間、少女はそれまで微笑みを絶やさなかった相手の顔に、初めて涙を見つけた気がした。

目深帽子の腕に抱かれた少女は、湖のあまりの冷たさや痛み、抱えきれない死への恐怖により、やがて、気を失ったのだった。

そして、次に目を覚ましたときには

「おい」

そう、次に目を覚ましたとき、少女の視界に飛び込んできた顔は、目深帽子のそれと程遠いものだった。

ちようどこんな風に、声だつて優しくなくて。

「おい、しつかりするんだ」

そこでようやく、少女は今体を巡っている声が、自分の意識の外側から聞こえてきているらしい、ということに気が付き始めた。

後頭部から足にかけて、柔らかくも固い感触がある。いつもの部屋に敷かれていた、絨毯のようだ。ということは、記憶をたどっているうちに眠ってしまったそのまま、夢の中でも思い出の旅をしていたのか。

しかし、なぜ絨毯なのだろう。ソファアに座っていたはずなのに。

「聞こえているか、目を覚ませ！」

一際大きくなった呼びかけに、少女は重い瞼を上げた。

滲んだ視界の向こうに、今となっては見慣れた男の顔がある。

「い、く、そ、つ」

一音、一音を噛み締めるように口にすればするほど、少女の意識は少しずつ現実へと引き戻されていく。彼の背後に天井と照明が見え、改めて、自分が仰向けに寝ているとわかった。

「気が、付いたかい」

僅かに落ち着いた、けれどまだ緊張感を含むその声を聞き、少女は何が起こっているのかと、目の前の顔に焦点を絞る。なかなかはっきりしてこないと思ったら、どうやら寝ていたあいだに、現実で

も涙を流していたようなのだった。

大きく瞬きをして目に溜まった雫を落とすことにより、やっと、極卒の強ばった顔が見えてくる。その表情だけでも滅多にお目にかかれるものではないが、今の彼の頬には、それ以上に目を疑うものがあつた。

白塗りの肌に浮き上がる、四本の細く、赤い線。

小刻みな点線にも見えるそれは、例えば尖った爪のような、鋭いもので引っ搔いた痕に間違いなかった。

「これ、わたしが……？」

ぞつと体を震わせて問いかけた先の極卒は、何を答えもせずただ、不安や心配を一緒にしたような顔つきのまま、こちらをじつと見つめている。

さらによく見てみれば、引っ搔き傷は彼の顎と詰襟の下に覗く首回りにまで、及んでいるらしかった。

「ああ……わたし、なんてこと」

傷つけてしまった。そう思うと、極卒への恐怖心より先にずっと深い悲しみが押し寄せ、少女は再び涙を流しながら、彼の顔に両手を伸ばした。

「おまえ」

もつすぐ頬に届こうかというところで、極卒の口が小さく動き出す。

「おまえ……猫の、姿になっていた」

その言葉を耳にした瞬間、少女の体は大きな震えが出て止まらなくなり、意識が一気に遠退いていくのを感じた。

落ちていく自身の内に、先ほどの夢にはなかったはずの、記憶の一部が蘇る。

歪んだ世界からこちらを見下ろす、小さな影。

そうだ、あの湖にいたのは、少女と目深帽子だけではなかった。水辺にぽつんと立ち尽くしていた枯木の根本から、一度沈んで浮上してくる少女の様子を、水鏡ごしに見ていた子猫があったのだ。

だがなぜ、自分がこのシーンを覚えているのだろう。飛び込んでからずっと、気絶していたはずではなかったか。

地を這い、脳天を貫く甲高い鳴き声が、少女の全身を駆けて行ったような気がした。

おもいで (後書き)

なのこの回想シーンについて、一部「雫」の歌詞を参考・引用いたしました

今回は特に極なのっぽくなくてすみません。本当に愛だけはあるのですが……

発熱

少女が倒れるのは、もう何度目になるだろう。

薄暗い寝室の中、腰をかけたベッドの縁で、極卒は微かに息を吐く。

しかも今度は熱まで出してしまったとかで、先ほどから背中越しに、彼女のひきつるような激しい呼吸が聞こえていた。

やるべき仕事は残っている。それでもこの場を離れられない所以は、どこにあるのか。その答えに気付きつつある自分を、認めたくないのだろう。彼は後ろの病人を振り返ることさえできずにいた。

今冬に入ってから、少女の不安定さは急激に加速している。初めてから過去のこととなるとすぐに意識を手放すような脆い娘ではあったが、今日のように知恵熱とでも言うべき症状まで露にしたのは、これが初めてだ。

限界が来ているのかもしれない、と彼は考える。少女の小さな身体では、もうこれ以上の記憶を抱えきれないのではないかと。

シートから無意識に右手を浮かせ、自分の皮膚をがむしゃらに削り取っていった、あの鋭い爪の感触を確かめようと、指の腹で頬を撫でたときだった。

「まぶか、さん」

無言の空間に、仄かな掠れ声が響いた。

驚いた拍子に顔から手を離し、ぎこちない動きで背後を見返ろうとすればまた、その熱を持った吐息は不快な単語を紡ぎだす。

「まぶか、ぼー、し、さん」

青白い肌をめいっばいに赤らめ、額に汗の玉まで作り、普段の物静かさとは程遠い姿で眠る少女。今日の前に横たわっている人物が、自分の知らない、一人の平凡な女の子なのではないかと、錯覚してしまいそうにさえなる。

自然、頬の辺りが強張ってくる。また、笑ってしまっているのだ。

「なんだよ、それ」

嫌な感想を振り払おうと、極卒は口を開く。しかし心とは思いつ通りにいかないものだ。言葉を切るやいなや、その黒々とした思いは彼の頭の中を支配して、気が付くと、少女のほっそりとした首に片手を伸ばしていた。

そうして結局、堪えていた気持ちを、吐き出すように言い放ったのだ。

「まるで、赤の他人みたいじゃないか」

もとより他人なのはわかっている。それでも多少は理解していたはずの少女が、極卒の知らない表情で、極卒の知らない男を呼ぶ様は、彼にとつてなかなか耐えがたいものがあった。

首の中心に添えていた親指でほんの少し、圧力をかける。気道に違和感を与えられた彼女は、酸素を求めてより早く、大きな呼吸を繰り返した。時折、短い声のような音も発している。

ふと目を上げれば、乱れた髪の間から、暗く冷たい色の右眼が極卒を見ていた。

瞳の奥でゆらゆらと底光りする水銀のような色彩は、彼もよく知

っている、少女の視線だった。

極卒は目を細め、皮の下で波打つ固くも柔らかい喉の芯を、その親指でゆっくりとしごいた。

窪んだところに指が引っかかり、少し力が加わってしまったたび、少女は苦悶に顔を歪めて「か」だとか「く」、と声にならない空気の塊を吐き出す。

けれどももこちらに向けられた目だけは、かえって蔑みの色を深めていった。

「そう。いい目だ」

それを前にしては彼も肌のあわ立ちを抑えられず、さすがに、認めざるを得ないのかもしれないと考え始める。

仕事が手につかなくなってきたこと、邸の警備に重点を置くようになったこと、疎ましく思っていたはずの、少女の過去探しに尽力していること。その全ての原因がどこに、誰にあるのかということ。

口元のいやげが止まらない。止める必要もない。これで少女に強烈な印象を植え付けられるなら、それでいて自分の心を知られずに済むのなら、どんなに悪く見られることも好都合に思えた。

だが不可解なことには、少女の冷めた目付きもある程度を過ぎると、何か違う感じを内包してくるのである。

今に始まったことではないが、極卒はこうなってしまうと相手の考えているところが全く掴めなくなり、どう対応するべきかわからなくなるのだった。

「か……いそ……あ、ひと」

息も切れ切れに口を動かす彼女へ耳を傾けようとしたそのとき、
寝室中にドアをノックする音が鳴り響いた。

一時は呆気にとられた極卒だったが、「よろしいでしょうか」と
言う部下の声を聞き取ったことであろうやく少女の首から手を離して
立ち上がり、その方へと向かう。

「例の資料であります」

ドアを開けてやれば相手はそう言い、何枚かの書類と一切れの新聞
記事を手渡すと、すぐに敬礼を見せて廊下を去った。

極卒はそれを見送ってから元のベッドに腰を下ろし、早速、受け
取った資料に目をやる。まずは新聞からと、手近のスタンドに明か
りを灯した。

その写真さえ載らない程度の小記事には、『××区炎上』との見
出しが振られている。発行されたのは一年より少し前。黄色い照明
に浮かび上がった本文をたどれば、おおよそ次のようなことが書い
てあった。

某月某日、とある区に建つ豪邸から火の手があがった。乾燥した
空気のために猛火は恐ろしい速度で燃え広がり、ついにはその地区
の三分の一の家屋が炎に包まれる大惨事となってしまう。死傷者
の数は三桁にのぼり、出火元となった邸の夫妻もともに死亡。彼ら
のたった一人の娘は、遺体や遺品などが発見されず、未だ消息不明
とのことであった。

出火の原因を言及する記述もない、妙に淡白で短い記事だ。けれ
ど極卒はそれを気にする様子もなく、ただ失踪したという娘の、括
弧にとじられた名前を見ようと目をこらす。

しかし次の瞬間、彼の視界は熱い感触とともに黒く閉ざされてしまった。

背中全体に密着する暖かさ、両肩にのしかかってくる腕の重さで、後ろから少女に目を塞がれたのだとわかる。

いつの間にか起き上がったのだらう。先の仕返しのもりだらうか。

「……だあれだ」

吐息混じりの囁きが、耳をくすぐる。

「決まっているだらう」

そう答えた後で相手の名前を言おうとすれば、本名どころか、呼び名すらなかったことに気付いて、愕然とした。

「いえない、でしょう」

少女の体が、繰り返して大きく上下するのを感じる。まだ、苦しくて仕方がないのだ。

「わたしにも、わからないことが……あなたにわかるわけ、ないわよね」

両目を覆う細い指たちは汗ばみ、まるで力というものが感じられない。自嘲的な言い方が、あまりにも痛々しい。

「馬鹿な真似をする暇があったら大人しく寝ている。治らないぞ」

異様ないたたまれなさに我慢できず、素っ気ない態度で目の上の手を引き剥がす。無理をしたせい、少女は極卒から体を離すとそ

のまま、力が抜けたようにベッドへと倒れこんだのであった。

布団をかけ直してやり、既に寝息をたてている彼女の、濡れて煌めく睫毛を見守る。

自分自身にどこまでも翻弄されるその姿は、哀れでありながら、かつ滑稽であるようにも思えた。

「わかったかも、しれないよ」

小さな眩きを残すと、彼も残した仕事を片付けるべく、少女の寝室を後にしたのだった。

発熱（後書き）

色々とわかったっぽい極卒の話

そろそろ二人がまともにお喋りする話を書きたいですね……

こたえあわせ

「答え合わせをしよう」

不意に口火を切られた少女は、ソファの上で反射的に顔を上げ、デスクに陣取る極卒を見遣る。まだ昼前という時刻に内務が終わったとは考えにくく、仕事中心に向こうから声をかけてくるなんて、珍しいこともあるものだと思った。

「こたえ？ なんのこと」

「もちろん、おまえの過去のことだ」

その言葉を耳にするや否や、少女は眉間に皺を寄せる。近頃は例の症状が大分落ち着いてきたこともあって、しばらくは自分の過去だの、記憶だのといったことには触れないで過ごそうとしていたところだったのだ。

それにしても、極卒はいつからこれほどまで乗り気になっていたのだろう。初めて会ったときに尋問されて以来、過去の話をしようにすると嫌な顔を見せるのは、彼の担当だったはずではないか。

「……おしごととは、もういいの」

話題から逃れようと素っ気ない態度をとってみても、相手はわざわざらしく首を傾げるだけだった。

「仕事？ そんなもの、今日は初めからありはしなかったよ」

「じゃあ、それはなによ」

そう言って少女が睨みつけた先、極卒の右手には、仕事の書類と
思いき紙の束が握られている。いつもと比べれば極端に量が少ない
気もするが、朝から今までそれと向かい合っていた彼の顔付きは、
仕事と同じか、またはそれ以上に真剣だった。仕事でなければ何
だというのだろう。

「ああ、これが」

少女の射るような視線に気を悪くするでもなく、彼は右手を挙げて
ひらひらとそれを振ってみせる。

「これこそが、鍵になるんだ。答えを導き出すための、ね」

頬杖の上で広がる口の形は、決して、少女に良い思いをさせるも
のではなかった。

「ここにある資料は、たったの二種類。うち一つは、ある火災事件
を採り上げた新聞記事だ」

「わたしと、かんけいあるの？」

「そうとも。推測が正しければ、大いに」

そう言いながら席を立つと、極卒は持っていた紙の中から色味のある
切り抜きを一枚引っ張りだし、少女に手渡した。踵を返す彼を横目に、
とりあえずその小さな切れ端へ視線を落としてみるが、幼い彼女に小難しい
活字を理解することは難を極める。

結局、読み取れたのは当時の日付程度のもので、けれどその日と

いうのは、どうやら自身がここに拾われてくるより少し前あたりを指しているらしい、ということであった。

「そこに、出火元の邸に住んでいたはずの娘が、行方不明になったと書いてあるだろう」

極卒が出した助け船にもう一度本文を眺め直し、少女はそうみた
いね、と相槌を打つ。

「それが、おまえだよ」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。

その感情のままに顔を上げて相手を見つめれば、彼はまた少しだけ目を細め、僅かに首を傾げてみせる。

「その邸の主人というのは我が軍の空軍少佐、平たく言えば私の知り合いだ。この記事を手に入れたとき、私はようやく思い出したんだよ。おまえの顔に、見覚えがあったことをね。彼の家で見掛けた家族写真、そこに映っていた娘の顔が、おまえと瓜二つだった気がしてならないんだ」

「つまり、わたしのおとうさんとおかあさんは火事で死んでしまつて、わたしだけが、そこから逃げだしていた……」

それが、少女と目深帽子の、旅立ちのきつかけになる事件だった、ということだろうか。

「その通り、察しがいいじゃないか」

褒められたところで特に嬉しく思いもせず、少女は黙々と頭を働

かせ、新たな情報をもとに整理のし直しを余儀なくされる。

「……ならまぶかさんとは、外でまちあわせたのかしら」

「そう、その目深帽子こそが、この話の本題だ」

ただの一人言に強い声を返され、少女は言葉を失ってしまふ。そんな様子にもお構い無しで、極卒は含みのある言い方を投げかけてきた。

「目深帽子という男は、いったい何処から現れたんだろうね」

「ごくそつは、それをしってるっていうの？」

「知りたいかい？ 推測で良ければだが」

知りたいかと聞かれれば、選択肢などありはしない。少女は胸の内に一抹の不安が滲むのを感じつつ、二三度、首を縦に振った。

「……そう。なら、教えてあげよう」

そのとき、少女は相手の顔に、ほんの小さな陰りを見たような気がした。

なぜだろう、今日の極卒はいつもと比べてどこかが違う。内側に何かを抱え込んでいるような、しかし謀を隠し持はからっている様子でもないような、実に形容しがたい印象をかもし出しているのである。

その微妙な雰囲気に含まれながら一つだけ息を吐くと、彼は普段とよく似た笑顔を向けて、ようやく、口を開くのだ。

「結論から言えばね、私は、目深帽子なんて人間は、初めからこの

世に存在していなかったと考えている」

イナカツタ

いなかった？

まぶかさんが はじめから いなかった？

愕然とする少女の反応を予想していたのかどうなのか、極卒はこちらを一瞥してから目を閉じると、持論の披露を続けた。

「少佐……おまえの父親はたいへんな働き者でね。実際、あの自宅に帰ることなどほとんどなかったはずだ。妻の方もそれなりに名のある人だったようだし、家族が揃う機会は非常に少なかったことだろう。したがって、彼らの娘は一人遊びに耽るしかなかった」

「……ひとり」

「今のおまえよりも、もっと小さな女の子だ。それが毎日一人きりで、さぞかし、淋しかっただろうね」

まさか 相手の言わんとしていることを察してしまった気がして、少女は大きく目を見開く。同時に、彼の瞼ものろのろと持ち上がっていた。

「孤独に耐えられなくなった娘は、心から遊び相手を欲したことだろう。やがて、それは願い通りに現れた、いや、生まれたんだ。彼女自身の、心の中に。それが、目深帽子だった」

紡がれる言葉が耳から侵入し、頭の中をぐちゃぐちゃと掻き回されるような感覚に襲われる。

少女はそれを必死に落ち着かせようと頭を抱え、突破口を切り開かんとばかりに、声を絞り出した。

「でも、まぶかさんの帽子や、わたしたちのお人形は、たしかにここにあるわ。ちゃんと、ソンザイしてる……あれはぜんぶ、まぶかさんが、かってくれたものよ」

「それも、おまえの思い込みに過ぎなかったと言ってしまえば終わりだ。空想の中で生み出されたはずの人物が、その空想の外に実在する者であるという錯覚を確信したとき、おまえは数少ない家族団欒の機会にも、その人物　目深帽子の話題を持ち出したはず。そして話を聞いた両親は強い罪悪感に囚われる。自分たちが構ってあげられないせいで、娘はこんなことになってしまったのだ、とね。……娘を哀れんだ彼らは、どうなると思う」

「……いつしよに、いる。まえよりも、ちゃんと、みてあげる」

家族の記憶もなく、親心を理解するには程遠い状況にあるはずの口から、このような言葉がこぼれてくるとは、彼女自身意外なことであった。

「そう、大事な一人娘をむげに扱うことなど、できるはずがない。彼らは娘の側にいる機会をなるべく増やそうとしただろうし、そうして理解を深めることで、娘の欲しがる物、喜びそうな物はなんでも買い与えてやったことだろう。おまえの言う帽子や人形も、その中に含まれていたはずだ。しかしおまえは、そんな両親の優しさをも、全て目深帽子との思い出に変換してしまった」

ねえ、みて。これ

自然と脳裏で再生される、目深帽子と二人で覗いた、シヨールウィンドウの記憶。

「ついでに言うなら、帽子や人形と同じくおまえと共に拾い上げた、その不格好な手袋。それも今になって思えば、少佐がかつて愛用していたものに、よく似ているんだよ」

この帽子、のっぽだから、きつとにあうわ

あのととき、少女に優しく微笑んで帽子を買ってくれたあの人、自分の父親だったとも言うのか。自分の父親に、目深帽子の幻影を重ねて見ていただけなのだ、極卒は、そう言っているのだろうか。

「もはやおまえにとって、目深帽子という男は父であり、母であり、そして、おまえ自身でもあったのだらう」

「まって。それならどうして、今のわたしのそばには、まぶかさんがいないの？ わたしのなかにいる人だったら、わたしをおいて、まぶかさんだけがなくなってしまうなんて、そんなこと、あるはずないわ」

そうだ。記憶が戻りつつある今ならともかく、初めは目深帽子と入水したことさえ覚えていなかった自分が、けれど目深帽子という存在だけは微かに記憶していた自分が、これまで彼に会いたくても会えない漠然としたもどかしさを抱え続けてきたことは、紛れもない事実なのである。極卒の話はまだ、この理由を証明するまでに至

ってはいない。

だが、彼は少女の反論に対して、さらに口角を吊り上げてみせたのだった。

「そうだね。だから、答え合わせをしよう」

「ねえ、なにをしているの」

極卒に促されるまま立たされたのは、彼の寝室に置かれていた、姿見の前だ。

鏡面に映る彼は、少女の背後で彼自身の両目を鉢巻きらしき黒い布で覆い、どうやら、目隠しを施しているようであった。

「私の持っていた資料に、新聞記事とはまた別のものがあつただろう」

自分で自分の目を隠すために、自分の頭の後ろで布の端を結ぼうとしながら話す軍人の姿というのは、間抜けを通り越して不気味でもある。

「あれには、私の精神分析の結果が書いてあるんだ」

「どこか、おかしいの？」

心配して言ったつもりだったのに、彼は何が面白いのか違うよと吹き出して、しかしそうかと思えば、いや違ってなどいないのかもしれないがと、一人勝手に嘲笑するのだった。

「ここ最近、私は強い既視感を頻繁に感じていた。それも、おまえの髪に隠された左目について、少しでも気にしたときに限ってだ。一瞬でも考えるだけで、夜中おまえの寝室に忍び込み、起こしてしまったおまえと話をして、その前髪に触れ、どけようとすると一連の流れが、一息に目の前を過ぎっていくんだ。実際そんなことをした覚えもなく、だが妄想にはあまりにも現実味がありすぎる。だから、試しに分析させてみたんだよ」

それについては、極卒よりも少女の方がよく記憶していることではあった。とは言え彼女の方もこの現象の所以まではさっぱりわからないままであったので、大人しく相手の言葉に耳を傾ける。

「自分がそんな体験を本当にしていたと知ったときは驚いたね。しかも一度や二度じゃない、九なんだよ。九回も、私はおまえの左目を目撃して、気を失い、記憶まで失っていた。おまえもうんざりしただろう」

「ええ。もうあんなのはあきあき」

「だから、これで終わりにしようじゃないか。今度はおまえが、おまえの目で、おまえの左目と向き合う番だ」

その言葉で、少女はようやく、姿見と目隠しの意味を理解した。極卒は鏡を介して彼女に左目の実態を確認させ、なおかつ自分が万が一それを目にして気を失ったりしないようにと、予防線を張っていたのだ。

「さあ、準備はできた。後はおまえの好きなタイミングで見るといい。それとも、私が手伝ってやろうか？」

「そうね、おねがいするわ」

左目のことなど、今まで不思議なくらいに気にもしないで過ごしてきたが、いざとなると、あの極卒の動揺しきった表情がどうしても思い起こされてしまい、少女は少しの恐怖を覚えてもいた。

まさか自らの記憶を消してしまうようなことはないだろうが、何となく、他人に背中を押ししてもらいたかったのである。

言っておきながら断られると思っていたのだらう、彼はこちらの返事に一瞬だけ口元から笑みを消し去ると、またにんまりと笑い直して、わかったと頷いた。探るように伸ばされた両腕の間に入り込み、少女は自分の肩に極卒の手を触れさせる。

二人は鏡から直線上に重なり立ち、窓からの光に青白く浮き上がる彼の左手だけが、少女の肩から首、頬を伝って、その銀の前髪に到達した。

髪を避ける手が熱く湿っていることに気が付いたとき、彼女は、緊張していたのが自分だけではないことを知ったのだった。

「……ああ……」

鏡の向こうで、髪の下から姿を現した『それ』は、

「どうだい？ 何が見える」

「こんな……こんなの、わたしの目じゃ、ない。きいろくて、するどくて……まるで」

止まらぬ震えを抑えようとしてくれているのか、肩に置かれた極

卒の右手に、力が入っていくのがわかる。

「まるで……猫の目、みたい」

その言葉を待っていたかのように、彼は少女の髪から手を離すと、目隠しの取り外しにとりかかりつつ、口を開いた。

「思うに、目深帽子というある種の人格は、おまえの中の大部分を占めていたんじゃないだろうか。それが長い“一人旅”の末に入水した瞬間、おまえの意識とは別に、一つの自我を持って独立したのだとしたら。そして、彼が自らの意識と肉体を犠牲に、おまえという人格を、切り離すことができたとしたら……」

「どづいづこと……」

少女はすっかり混乱していた。鏡に映し出される強張った顔は自分のものでないように思われたし、極卒の話はあまりにも突飛すぎている、夢でも見ているのかと疑った方がまだましなのではという気さえしてくる。

「前に、おまえはあの湖で猫を見たことがあると言っていたね。人の体を離れた意識が、その猫の体に入り込み、肉体を奪ってしまっただとしたら、どうだろう。人格の半分を失った意識では支配しきれなかった名残が、その左目や猫の姿なのだとしたら……ねえ、おまえはどう思う」

「わからないわ。わからない……まだ、まぶかさんのことだって、しんじられないの。だってあの人は、気絶したわたしに、いきをくれた。いっしょうけんめい、わたしを、たすけてくれようとした……」

「どうして、気絶していたはずのおまえが、それを覚えているんだい」

「それは」

大粒の涙が、とめどなく頬を伝い、流れ落ちる。

この短い時間の中で、目深帽子のみならず、自分の存在すらもが音を立って崩されていく感覚が、少女は恐ろしくてならなかった。

「行くよ」

頭のとっぺんに重みを感じて目を上げれば、知らぬ間に目隠しを外していた極卒が、少女の頭に乗せた片手を、伏し目がちに見下ろす姿が、鏡越しに見えたのだった。

「ボクらの出逢った、あの湖に」

こたえあわせ (後書き)

ずいぶん迷いながら書いた話。今までで一番の長さになってしまいました

恐らくは、次で一通り終わらせられるはずですが

哀歌

進めば進むほどに日差しを失い、薄暗くなっていく車の中に、雲よりも重い沈黙が滞る。

シートに腰を下ろして以来、極卒と少女は、互いに一言も口を開いていなかった。

少女は邸から持ってきた黒い帽子を抱えこみ、対話でもするかのように頭を垂れたきりであったし、一方の極卒も、そんな彼女を見下ろしながら本当にこれで良かったのだろうか、喉にせり上がってくる多くの言葉をもてあましていた。

しかし彼の葛藤は、当の本人でさえ驚くほどに、あっけなく限界を迎えてしまうのである。

「おまえは、信じるのか」

小さな呟きが自分の口から出たことに気が付くのと、左隣の少女が帽子から顔を上げたのは、ほとんど同時だった。

ここまで来れば言うほかはあるまい。一つの覚悟をもって、極卒は言葉を続ける。

「……私の言ったことを。おまえはもっと、疑っていいはずだろう。全部データラメだと言って、拒絶してしまっても、おかしくはない」

「でたらめなの？ ぜんぶ」

少なくとも極卒自身に、嘘を言ったつもりは全くない。しかしそ

れを証明するものが乏しいのもまた事実であり、否定の言葉を口にもるのがやっとだった。

これでは肯定したようなものではないか。再び俯きぎみになった少女を目にしてなおのこと痛感した極卒だったが、直後に彼女が口にしたのは、予想外の言葉だった。

「わたしね、ごくそつのお話をきいて、おもいだせたことがあるの。おかあさんのことよ。……まだ、ほんのすこしだけれど」

相変わらず責めてくる気配がないのもそうだが、こんなにも静かに、落ち着いた様子で何かを思い出したと言う少女を見たのは初めてのことだ。

「大きな、おうちのなかなの。おとうさんはいなくて、おかあさんが、さきにうらぐちからでていなさいって、たいせつなもの、たくさんかばんにつめて、わたしにかけてくれた。そうして、おまもりにも、この手袋をつけてくれたの」

「つまり、その手袋は親から与えられた物だと認めるのか。手袋に限らず、帽子や、人形も」

そう訊ねると、少女はまだ決めかねているのだと言わんばかりに、再び口を閉ざしてしまふ。

別に、彼女の悩みを深めたくてやっているのではない。ただ、過去についてどれを真実として受け止めるにせよ、本人がちゃんと納得できるようにしてやりたいだけなのだ。

そして、そのために言わなければならぬことを、彼はその幼稚な自己防衛本能の下に、未だ隠し続けている。そんな自分の弱さが、かえって己の心を蝕んでいくような気がして、とても、我慢などし

ていらなかった。

「……以前、私は視察に向かう途上で、一機の空軍機に襲撃されたことがある」

すると少女は驚きに目を見開いて極卒を見上げてきたが、健在の彼を前に訊ねるまでもないと判断したのか、その心配そうに開かれた口が、実際に声を発することはなかった。

「暗殺については、日頃より常に手を回していたことだから特に問題はなかった。ただ、私を殺そうとした者というのが、我が軍の空軍中尉だったんだ。これは立派な反逆罪だよ。だから私はその男と事件に関与したと思われる全ての容疑者に、制裁を下すことにした。その容疑者の中には、彼の上司である空軍小佐……おまえの父親も、当然含まれていた」

少女は何も言わず、ひたすら大人しくこちらの話を聞いている。彼女は知っているはずだ。極卒の言う『制裁』が、どれほど非道な行いであるのかを。

「おまえの故郷を燃やしたのは、私だよ」

にい、と口角を持ち上げ、とびきりの薄気味悪い笑顔を作ってみた。激しくぶれる眼光から、相手がひどく動揺していることがわかる。

彼女に嫌われたくないのか、一層のこと嫌われてしまいたいのか、それは正直なところ極卒自身にもわからなかった。

ただ、彼が直後に明かす話は推測でも、ましてや作り話でもないことだけは、確かである。

「私は小佐を捕らえて、彼の邸周辺に火を放つと決定した。都心に近かったこともあってあまり大規模にはできなかったが、代替として彼の家族に直接手を下すことで、見せしめにした。……家族写真を見たというのは、そこに乗り込んだときの話だ。実際に確保できたのは、彼の妻くらいだったわけだが」

多数の死傷者が出た事件の割にまともな記事がなかったのは、彼が仕向けた圧力の賜物だったのである。

今思えば、小佐夫人はこの少女を逃がすため、自らを囿にしたのだ。広いリビングの中心でじっとこちらを睨んでいた不動の眼差しは、極卒に対する憎しみや恨みから来るものとこれまで受け取っていたが、その実は娘を誰にも渡すまいとする、母の強さの表れだったのかもしれない。

そこまでして守り通した娘が、今自分の目の前に座っているというのは、まことに残酷な星の巡り合わせと言うべきか。

「おまえの両親を、そして、おまえを死なせたのは……私なんだよ」

何度、告げずにいられたらと思うだろう。

奈落に生まれた鬼のごとしと怖れられて以来、まさか残っているとは思いつかなかったなげなしの良心を全て差し出してしまったような気分になって、極卒は嫌な息苦しさを覚える。

全てを聞き終えた少女は、しばらく凍りついたようにこちらを見据えてから、やがて心を鎮めるようにゆっくりと瞼を落とし、長い長い息を吐いた。

そうして前へ向き直りながら声を出すまでの間が、実際はたかが知れている程度だとしても、極卒には永遠のように感じられた。

「どうして、話してくれたの」

短い返事は単純な疑問詞のようにも、忌まわしい運命を突きつけられたことに対する、責め句のようにも聞き取ることができた。

「……私を、あまり信用し過ぎるなどということだ。今の話は確かに事実だが、だからこそ、そんな私の推測を、おまえが信じるいわれは何処にもないとわかるだろう。嘘でおまえを惑わせ、楽しんでいられるだけかもしれないじゃないか」

たとえ楽しむつもりは毛頭なくとも、目深帽子を根底からなき者にしたいという願望が無意識下で働き、その通りの結論を構築してしまった可能性はある。

極卒が調べてきた中で、目深帽子なる男が存在したことを証明する物は、今のところ一つたりとも見つかっていない。しかしだからといって、それがそのまま、彼の存在を否定する証拠に、本当になり得るのだろうか。

少女と猫の件もそうだ。生まれつき目の色が片方ずつ違う人間もいないことはないのだから、それだけで幽体離脱だの憑依だのを持ち出すのは、あまりにも非科学的といえる。

少女の左目を見て気を失ったのも、部屋で暴れまわる彼女の姿が猫に見えたのも、全ては激しい動揺がもたらした錯覚だったのかもしれない。

極卒は今や、自分の考えに自信を持ってなくなっていたのだ。

少女は何も言わないというより、何も言うことができない様子で、じっと滑らかな帽子の光沢を見つめていた。無理もない。自分を信じるなどと言う人間の言葉ほど、信じるべきか否か、迷うものはない

のだろうから。

車はやがて速度を落とし、最後に短く身震いをして静かになった。開かれた後部座席から、小さな青い靴が一足、続いて先の鋭い黒革のブーツが、まっさらな雪に印を刻んで歩み始める。

「なぜ、ここに来ようと言ったかわかるかい」

まるでそこだけ時間が止まっていたかのように、いつかと変わらぬ美しさと冷たさを保ち続けている湖のほとりで足を止めると、極卒は少し先の少女へ、静かに問いかけた。

「水中にある死体は長い時間をかけて屍蠟しんろうとなり、以降決して腐ることがないという。それが本当なら、ここは屍蠟を作るのに絶好の環境だ」

沈黙を続ける少女の背中が、後ろから見ても猫のように丸められているとわかる。細い体の横からは、抱き締めた帽子のつばがはみ出していた。

「要するに、この湖底にはきつと、一年前の死体が当時の姿のままに残っている。推測通りであれば、恐らくはおまえの本来の体が、間違っていれば目深帽子の死体が……だから、今からそれを確かめようと思っただけ」

これが、最後の答え合わせ。

物事の真相が始まりの地にあるという通説は、どうやら本当だったらしい。

「……そんなこと、しなくていいわ」

思いもよらない言葉と共に相手が振り返ったのは、それからすぐのことだ。

彼女は極卒と目が合ったとたん、また何を思ったのかしょんぼりと俯いて、淡々と話を紡ぎだす。

「ずっと、きになっていたの。今日のごくそつは、いつもとなにかがちがっていたから。えがおもやっぱり嫌なかんじで、でもそれもいつもとちがう、ううん、いつもよりもっと嫌で、どうしてなんだろうって。……今、やっとわかった」

そう言って、再び顔を上げたその眼差しこそ、極卒からしてみれば何とも体言しがたい色味を帯びて見えた。

別に、初めての目付きではない。ただ受け入れられないだけで。

「ごくそつ、今日はずっと……つらそうなんだって。わらってるときもすぐく、むり、してるみたいで……そんな人が、わたしを騙して、たのしんだりするかしら」

この期に及んで、彼女がこちらを心配するような目を向けるなど、あり得ないことだと。

「だからもう、こたえなんていらさないの」

そのとき、湖面の輝きと雪明かりを背に受ける彼女の右目は既に極卒をまつすぐ捉えて離そうとしない、かつて見た母親のそれを彷彿とさせるものに変わっていた。

「ごくそつの話、信じないことにしたから」

「信じ、ない」

仕方がないと、覚悟していたつもりだったのに。

面と向かって拒絶されるといっなのは、彼の予想を遥かに越えて、堪えるものがあつた。

焦点を失い始めた視界の隅で、だって、と少女の続ける声が響く。

「だって、ごくそつの話がほんとうなら、わたしはきっと、かわいいそつな子猫に体をかえしたくなってしまつもの」

耳に入ってきた言葉の意味を理解できず我にかえれば、そこにはいじらしい微笑みを浮かべる少女の姿があつた。

笑つた彼女を見るのは、いつ以来だろう。

「わたし、まだ、このせかいにいたいわ」

夢でも、見ているのではないかと思つた。素直に喜べない彼の性である。

「で、でもボクは、おまえの両親を」

「そついわれても、ほとんどおもいだせない人たちだもの。じつはあんまりじつかんがわかないの。……いけないことかもしれないけれど、はじめて、忘れていてよかつたつて、おもつたくらいよ」

恥ずかしそつにとんでもないことを言う少女に対して、極卒はもはやどのような顔をすれば良いのかすら、判断がつかなくなつていた。

けれど彼女が、自分のいる世界を選んだことだけは、確かなよう
で。

それを思えば、当然ながら、悪い気はしなかったのである。

「ごくそつの話はまちがいだから、この湖にいるのだって、まぶか
さんにきまっているの」

くるりと向きを変え、作られた物語を読み上げるような口調で、
数歩だけ、湖に歩みを進める少女。

「……でもそれなら、この帽子だけでも、まぶかさんにかえさなき
や。冬の水は冷たいから、きつとあたまが冷えて、淋しがっている
わ」

そして、少女はそれまで大事そうに抱えていたシルクハットを、
現れ始めた一番星に向かって、高く、高く掲げたのだ。

刹那、一陣の風に勢いよくさらわれたそれが、上空で小さな影帽
子となるのを見送った極卒は、

「ばいばいバイビュ」

と震える、星屑のような声を聞いたのであった。

「そう言えば」

あることを思い出し、極卒は踵を返した少女に話しかける。

「記事のおかげで、ようやくおまえの名前がわかったよ。やはりそ

れで呼ばれた方がいいだろう」

「いいわよ、そんなの。いつもどおり、すきによんでくれれば、それがいいの」

全くこの娘ときたら、そうやっていつも人の想定を軽々と壊してしまう。それがまた妙に痛快な感覚なので、極卒はついに、かつての自然な笑顔を取り戻していた。

「そうだね。それじゃあ……」

ゆっくりと右手を差しのべれば、少女も自ら手袋を外し、露になった小さな左手を、その冷えきった手のひらに委ねるのだった。

哀歌（後書き）

一段落ということ、少し長めに後書きを書こうと思います

ただ極卒となのが一緒に暮らす話を書き散らかしたくて始めたこのシリーズでしたが、気付けば後半はかけ足気味の続きものになってしまいました。

色々まとめきれないままに書いたので、まだ矛盾点等が残っているような気がしてなりません。見つけたときはご指摘くだされば嬉しいです。

これ以上話を進める予定はありませんが、今後も加筆修正、思いつけばとるに足らない短編も、できれば間に挟みたいと考えてはいます。いつかふと思い出したときにでも、またここを覗いてみてください。できれば幸いです。

それでは改めまして、ここまでお目通しくださり、まことにありがとうございました。極なのは永遠のジャスティス！

おやすみ

「ごくそつ、もうおひるよ」

見上げた白い塊に声をかけてみても、僅かに身じろぎをする程度の返事しか返ってこない。

寝室の鍵が開いていたから遊びに訪ねていいものと思って入ったというのに、部屋の主はたまの休日の良いことにひたすら情眠を貪っているだけとは呆れた話だ。少女は丸い片目をむすりと細めて、近寄ったベッドの縁に手袋で被われた両手をついた。

休みと聞いたときから今日くらいは一人遊びをせすにすむと期待していたのに、これではあんまりというものだ。

「せつかくのおやすみなんでしょ。たまにはつきあってちょうだい」

「せつかくの休みにもおまえなんかの相手をしていたら、私の体が保たない。大人しく自分の部屋で遊んでいることだね」

白山の麓から飛び出していた黒い後頭部が、ようやくまともな口を開いてくれたかと思えばこの態度である。しかし少しくらい邪険にされた程度ですぐごとと退却するような少女でもない。

こうなったら意地でも相手をさせてやるまで戻るわけにはいくまいと、干したてのままに盛り上がる掛け布団ごと彼の背中を揺さぶってみたり、しきりに文句混じりのモーニングコールを投げかけたりしてみたのだが、効いた様子は全くないようだった。煩わしそうに頭まで布団を被ってしまったあたり、むしろ逆効果だったとも言える。

力づくでは体力を消耗するだけだと理解して仕方なくベッドから体を離すも、他に良い手段が思い浮かばない少女は悔しさをもて余して唸り声を捻り出すくらいしか、できることがなかった。

「遊んで」

「嫌だよ」

「……いじわる」

「意地悪で結構」

こうして言葉を返すのも、ここで一緒に遊ぶのも、起きている時点で大した違いはないだろうに。勤労の苦しみなど少しも知りえない彼女はただただ難儀な気持ちを抱き、大きい饅頭のようになった極卒へ睨みを利かせる。

ところがある程度無言の攻防を繰り返していると、不意に、ベッドの膨らみを見つめる今の状況が、かつて聞き知ったおとき話の場面と重なり合うような気がして、知らず知らずのうちに口を開いていた。

「……ねえ、ごくそつ」

「なんだい」

「ごくそつのお耳、どうしてそんなにまっしろなの」

先ほどまでのやり取りとはなんら脈絡のないその問いかけに、極

卒はしばらくの間黙っていたものの、やがてこちらの意図するところを酌み取ったらしい。ほどなくして、「それはね」と気色の悪い猫なで声が返ってきた。

「肌が白ければ、誰からも神秘的に見えるからだよ」

「ごくそつの爪って、どうしてそんなにまっ黒なの」

「誰が見ても、私が普通でないと思えるようにだよ」

「ごくそつのくちびるは、どうしてそんなに赤いの」

「遠く離れた人にも、私の笑顔がよく見えるだろう」

「ごくそつのお目めは、どうしてそんなに大きいの」

「大勢集った人々を、一度に見渡しておきたいんだ」

どこかしつくりこない、と少女は感じた。童話通りの模範解答でないことは百歩譲ってよしとしても、相手の返事は彼女が求めているものと、何かが違うような気がしたのだ。

しかし、それが個人と大衆の違いに対する不満であるとは、当の少女とて夢にも思わなかった。

「それじゃあ」

お話通りの質問すらあしらわれてしまった今となっては、あえて切り札をとっておく必要もない。少女は実につまらなそうに、最後の問いを口にした。

「ごくそつのお口は……どうしてそんなに大きいの」

「それはね……」

だが、その予想はようやく寝返りを打って披露されたあのにやけ面の前に、突如として裏切られたのである。

「おまえを一呑みにするためさ！」

掛け布団の端を持ったまま勢いよく体を起こした彼の姿を見たとき、少女は『ふとんのオバケがでた』と心の中で叫び、その次の瞬間には、すでに目の前が真っ白になっていた。

同時に柔らかな感覚が全身を包み、芳ばしいお日さまの香りと、未だに嗅ぎなれない極卒の匂いとが微かに混ざりあつて鼻先を覆う。どうやら、布団を一枚まるまる被せられてしまったようだった。

混乱と面白さで少しばかり興奮気味に足掻き、どうにか頭だけを布の外へ出して安堵の息をつく。

そうして前を見ると、普段の服装から上着だけを取ったような格好でベッドサイドに腰をかけていた彼の、とても愉快そうな笑顔に行き当たった。

「お目覚めかい。ひどい寝癖だね」

からかってくる物言いに、少女は慌てて乱れた髪を撫で付ける。少しでも楽しんでしまった自分が恥ずかしく思えて頬をふくらませれば、相手はなおさらいやらしく口の端を吊り上げた。

それがまた悔しかったものだから、彼女はついに床を蹴って羽毛布団にくるまれた鳥のようにふんわりと跳び上がると、小さな放物

線を描いて目の前の男に降りかかった。

いきなり足の間落ちて来られ、丸くした両眼を閉じたり開いたりしているその隙に、布団の合間から出した両手で黒い髪をさんざんかき混ぜてやる。手袋の静電気でいい塩梅に崩れたそれを前に、得意になって口を開いた。

「あなたこそ」

直後、少女の瞳に世にも珍しいものが写りこむ。

こちらの言葉にまた一つ瞬きを返した極卒が、とたんに吹き出して笑いだしたのだ。

もちろん、彼の笑顔自体はそう珍しくもないどころか、日常的な表情と違って差し障りのないものだった。

けれど、その裏に何かを隠すのを忘れてしまったかのような、というか、これほどまでに素直な笑い方を見せてくれたのは、恐らく共に暮らしてきたなかで今回が初めてのことだったのである。

それも大笑いといった様子で、もうしばらくは腹に手を添えて一人、愉しそうに笑っている。さすがに複雑な気分になってきた少女が再び声をかけようとすると、不意に体を反らして天井を仰ぎ、はあと清々しい声を吐き出してこうぼやいた。

「あーあ。笑ったらまた眠くなってきた」

「ずっとねてたの？」

「そうとも。もう充分遊んでやっただろう。退屈ならおまえも自分の部屋で寝ているといい」

だから返してもらおうか、と無理矢理布団を剥がされそうになつた少女は、咄嗟に自分から離れていく一端をひっ掴み、そのまま床に就こうとした相手の隣へもぐり込んだ。

「どつして……」

化粧もせず　それでも唇の色は白いシーツに落ちた花のようにはつきりとしているのだが　髪型も乱れ、まさに素の驚きを露にしている極卒の顔が目と鼻の先にあつたことにこちらまでびっくりしてしまい、すぐに寝転んで背を向けた。

　　つい先ほどまで自分ばかりが使っていた『どうして』に、さて理由などわからないのにどう答えたものかと目を瞑る。目を瞑ると、人の体温を内包したふかふかの誘惑にとらわれて、一刻も早く夢の世界へ翔んでいきたいくなった。

　　翔んでいきたくないので、理由を早急に拵えて、一刻も早く、眠ってしまいたかった。

　　どうせ寝るなら、あの広すぎる客間の冷たくなってしまったベッドなんかより、極卒が温め続けていたこのベッドの方が良いに決まっている。

　　答えならそれで充分だろうと口を開くも、まぶたとともに重くなつてしまった唇は、必要最低限の言葉さえ容易に紡がせてはくれなかった。

「だって……ごくそつの、ほうが……あつたかい、もの……」

　　まあ今のも伝わらないことはないだろう。そう考えるやいなや、少女は背後からの反応も待たずに意識を手放した。

次に目を覚ましたとき、辺りは西日も山の端はに隠れようという頃合いであった。

頭を覆う布団越しにもその薄暗さを察した少女は、ひどく勿体ないことをしたような気がして慌てて体を起こす。夕闇に溶け始め、見えづらくなつた壁掛け時計の文字盤を凝視して時刻を確かめると、改めて、二人遊びができる貴重な時間をよもや昼寝などというつまらないことで無駄にしまった自分に落胆した。

そうしてふと、自らが座っているベッドの上に目を遣つてみる。

そこに他人の姿はなく、素手で傍らのシーツをさすつてみても、先ほどまで誰かがいたような温もりは感じられなかった。

あの答えに納得してくれなかったのかわからないが、きっと、眠つてすぐに自分のベッドへ運ばれてしまったのだらうと少女は考える。その間に起きて寒い思いをしなかったのが不幸中の幸い、終わり良ければなんとやらといったところか。

横のチェストの上に極卒からの書き置きを見つけ、暗さに慣れてきた右目がこの部屋をやはり彼のものであると認識するのは、それから間もなくのことである。　　が、

『おまえが剩あまり騒いだものだから目が冴えた。先に執務室に行つて
いる』

という堅苦しいその文面を、学の足りない彼女が読むことができる
までには、まだまだ長い時間が必要なようであった。

おやすみ（後書き）

ちよつと大胆なこの話

書いたはいいものどこに入れたらいいのかわからなくなってしまったので、とりあえずここに置いておこうと思います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6695/>

極卒くんとおんなのこ

2011年11月20日18時53分発行